

朝酌川河川改修工事に伴う

西川津遺跡発掘調査報告書

— I —

昭和 55 年 12 月

島根県教育委員会

朝酌川河川改修工事に伴う

西川津遺跡発掘調査報告書

- I -

昭和 55 年 12 月

島根県教育委員会

例　　言

1. 本書は昭和55年度、島根県教育委員会が県土木部の委託を受けて実施した、朝日川河川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 調査地点は、島根県松江市西川津町字宮尾坪内 558番地他で、次のような調査組織構成で調査を行った。

- ・調査主体

島根県教育委員会

- ・事務局

遠藤豊（文化課課長）、藤間亨（文化課主査）、長谷川行雄（文化課課長補佐）、秋月延夫（文化振興係長）

- ・発掘調査員

勝部昭（文化課埋蔵文化財係長）、石井悠（文化課文化財保護主事）、宮沢明久（文化課主事）、村尾秀信（同）

- ・調査協力者

三宅博士（八幡立つ風土記の丘資料館）、平野芳英（同）、山田克己（同）、遠藤浩己（島根大学学生）、浦田和彦（同）、岩井直道（同）

なお、遺物整理には、上記の者のほかに次の者が参加した。

井上洋子、佐藤順子、弓場睦子

3. 調査および整理にあたっては、次の方々から御指導、御助言をいただいた。（敬称略、順不同）

山本清（島根大学名誉教授）

町田章（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）

金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）

伊東照雄（山口県教育委員会文化課）

東森市良（島根県埋蔵文化財調査員）

宍道正年（島根県埋蔵文化財調査員）

4. 描載図面は、石井悠、遠藤浩己、浦田和彦、村尾秀信、井上洋子、弓場睦子、佐藤順子の作図、製図にかかり、写真は、村尾秀信、有限会社井上松影堂によったものである。

5. 本書の作成は、上記調査指導の先生方の助言を得ながら、調査および遺物整理に携わった者が協議をして行ない、編集、執筆は直接調査を担当した村尾秀信があたり、一部を石井悠が担当した。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 調査の概要	1
III 位置と歴史的環境	2
IV 遺跡の概要	5
V 出土遺物の考古学的観察	7
1. 繩文式土器	7
2. 弥生式土器	11
3. 土器	17
4. 上製品	18
5. 石器	19
6. 木製品	22
7. その他の遺物	30
VI まとめ	31

挿図目次

第1図 発掘風景	1
第2図 グリッド配置図	2
第3図 遺跡周辺の地形図	3
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第5図 調査区上層図	6
第6図 繩文式土器拓影(1)	8
第7図 繩文式土器拓影(2)	10
第8図 弥生式土器実測図(1)	12
第9図 弥生式土器拓影	13
第10図 弥生式土器実測図(2)	14
第11図 弥生式土器、土器実測図	16
第12図 弥生式土器実測図(3)	17
第13図 土製品実測図	19
第14図 石器実測図(1)	21
第15図 石器実測図(2)	22
第16図 木製品実測図(1)	25
第17図 木製品実測図(2)	27
第18図 木製品実測図(3)	28
第19図 木製品実測図(4)	30

第20図 漆器実測図 31

表1 石器一覧表 23

図版一覧

- | | |
|------|---------------------------|
| 図版1 | 遺跡周辺の航空写真、遺跡遠望 |
| 図版2 | 発掘前の状況、発掘風景 |
| 図版3 | 北壁・東壁の土層 |
| 図版4 | 遺物出土状況 |
| 図版5 | 各種遺物出土状況（縄文式土器、石器、弥生式土器） |
| 図版6 | 木製品出土状況（鍬、鋤、柄状木製品） |
| 図版7 | 木製品出土状況（鳥形状木製品、高環） |
| 図版8 | 木製品出土状況（横槌、魚籠枠状木製品）、縄文式土器 |
| 図版9 | 縄文式土器 |
| 図版10 | 弥生式土器 |
| 図版11 | 弥生式土器 |
| 図版12 | 弥生式土器・土製品 |
| 図版13 | 石器 |
| 図版14 | 木製品 |
| 図版15 | 木製品 |
| 図版16 | 木製品・漆器 |

I 調査に至る経緯

本遺跡の発見は古く、松江市西川津町を通り県道松江・境線沿に設けられた電柱工事中に弥生式土器等の遺物が出土したことに始まる。その後、今日に至るまで相当の年月を経ているが、遺跡の範囲及び性格については調査を行なった例もないため不明であった。

ところが、昭和54年3月になって、これまで西川津遺跡と称されていた地点から南へ約500m離れた学園橋付近でも弥生式土器片、土師器片が発見され、遺跡の範囲拡大が考えられたので、西川津遺跡として取扱うこととなつた。発見は、下流部分から開始された朝駒川河川改修工事現場であり、付近の遺跡分布調査中の島根大学学生によってである。

遺跡発見の知らせを受けた松江市教育委員会は、現地踏査を行ない、島根県松江土木建築事務所と協議した結果、同事務所長名で遺跡発見通知書が提出されることとなつた。

これを受け、当教育委員会文化課は、県土木部河川課と本遺跡の取り扱いについて協議を行なつた。協議の結果、新発見の地点については、工事も最終段階であり発掘調査等を行なうこともできないが、今後工事が予定される上流部分、即ち当初から遺跡とされていた地点に向う工事にあたっては、事前の発掘調査を実施するということで合意に達した。

その後、調査について度数の協議を河川課と行ない、昭和54年度に第1次調査を実施した。第1次調査の結果、本遺跡は予想どおり広範囲にわたるものであることが判明したので、さらに河川課と協議した結果、島根県土木部から総額1,200万円の経費で発掘調査の委託を受けて、当教育委員会が、昭和55年7月7日から調査を実施したものである。

II 調査の概要

本遺跡は、昭和54年度の試掘調査の結果にもとづき、4つの試掘場のうち、遺物の出土が多かった第III・第IVグリッドを含む上流部分を調査対象地とし、東西15m、南北72.5mの調査区域を設定した。そしてこの調査区を磁北を基準に5mの方眼を組み、北東の交点を基準に中グリッド（例えばAK103）とし、さらにこの中を一辺2.5mずつに四区分し、北西区から右まわりに1~4の小グリッドを設け、それを遺物取り上げの際の最小区域とした。遺物は、土器、石器、木製品などの人工遺物、および植物種子、獸骨などの自然遺物に分類し、小グリッドを単位にレベル測定のうちにこれを採取した。

調査は、昭和55年7月7日から始めたが、試掘調査の結果から、無遺物包含層である耕作土と粘



第1回 発掘風景

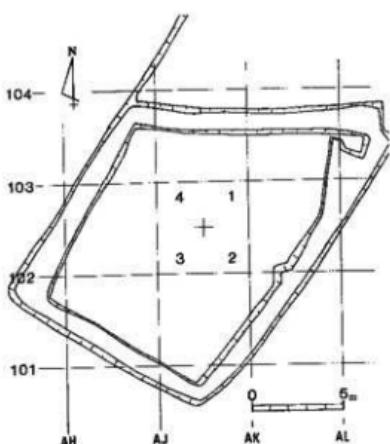
土層については、重機による掘削、拂土を行ない、地表下約80cmまでを除去した。調査区は、朝鈴川が大きく蛇行する内側にあり、川岸近くで終始湧水に悩まされた。また今夏は、例年ない雨の続く気候となり、川の氾濫のため調査区全域が2度も冠水したことわざった。そしてまた、遺物包含層の砂礫層に至ってからは、全面びっしりと足の踏み場もない程度遺物が散在し、しかもその層が1m近くの厚みを持って堆積していたため、作業の手を大いに煩わせた。このような状況のなかで作業は2ヶ月半を費し、当初予定の1/2の面積の調査が済み、残った部分については明治56年度引き続き調査を行なうという方針が決定し、10月5日一応の現場での調査を終えた。

この間、弥生式土器を中心に、縄文時代早期から古墳時代に至るまでの土器、鐵・銅に代表される農耕具などの多数の木製品、石器等、各種多量の遺物が検出された。しかしながら、明確な遺構は確認することができなかった。出土した遺物は、県教委文化課において一連の作業を経て整理作業を行なった。なお、この間、山本清氏、町田章氏をはじめ各方面の先生方より御指導をいただいた。

III 位置と歴史的環境

本遺跡の所在する地籍は、松江市西川津町字宮尾坪内558番地他で、大内谷地区の南西部に広がる沖積地の低平な水田中にある。このあたりは松江市街地の北東部を占める川津地区の一角にあたり、鳴山、和久羅山の山塊が西にせり出し、やがて朝鈴川へと下ってゆく大内谷丘陵と橋本丘陵にはさまれたところに位置する。ここを朝鈴川が大きく蛇行しながら南流し、やがて大橋川へ流れ込むが、本遺跡はその河川敷を中心に、東西約200m、南北約800mの広がりを持つものと推定されており、遺物を多量に包含している砂礫層は地表下200~300cmで、海拔-0.5~-1.5mを測っている。

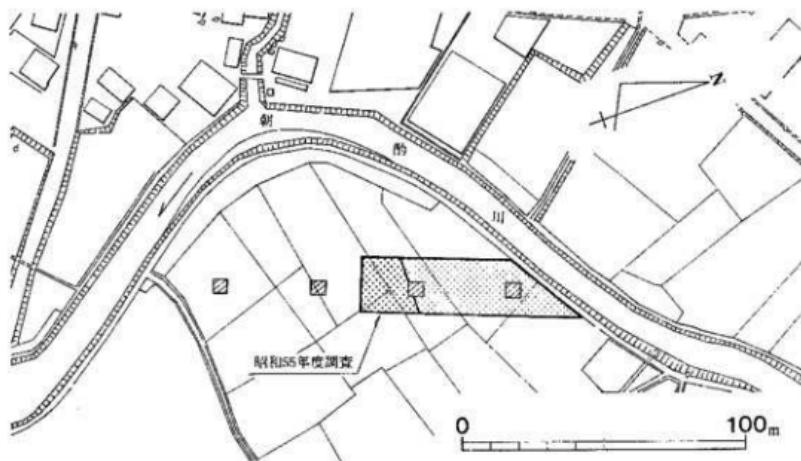
さて、本遺跡の周辺には、縄文時代の遺跡として、金崎遺跡など平野周辺で点々と知られているが、発掘調査によってその内容が知られているものは今のところない。弥生時代になると、鳥根大学構内遺跡、貝崎遺跡、橋本遺跡などが知られており、特に、本遺跡より1.5km程下流に所在するタテヨウ遺跡は昭和52年の発掘調査によって、弥生式土器を中心とした各種多量な土器、木製品、特殊遺物などを検出したことにより、よく知られているところである。一般に弥生時代の遺跡は、



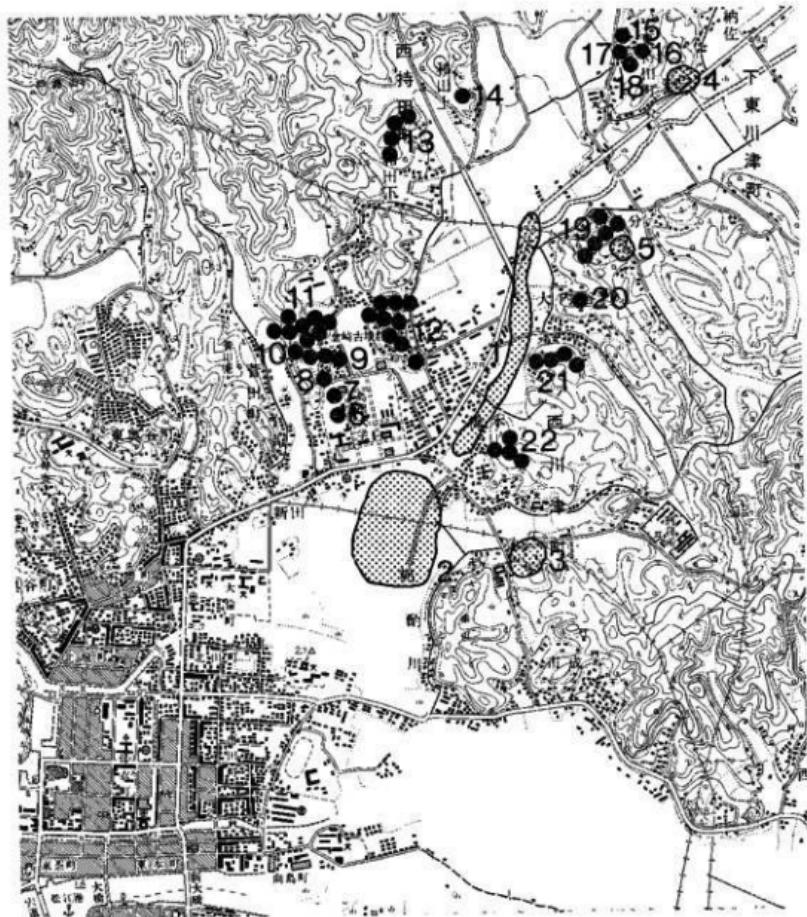
第2図 グリッド配置図

本遺跡、タテチヨウ遺跡と同様に、多くは平野・瀬辺の水田面下に深く埋れているものと思われ、現在周知されているものの数倍にも達すると見られる。そして、次の古墳時代になると、比較的古式様相を持つ下東川津町の道前古墳群、中期後半の金崎古墳群、皆田ヶ丘古墳、菜師山古墳などがあり、このうち発掘調査のなされた金崎1号墳は、全長35mの前方後方墳でやや細長い堅穴式石室を内蔵し、副葬品として古式様相をそなえた各種須恵器などとともに、滑石製異形子持勾玉・同管玉・同畫玉・めのう勾玉・ガラス玉・滑石製小玉・彷彿内行花文鏡・金環・直刀などの豊富な遺物が検出されている。これらは、5世紀後半から6世紀前半という比較的短期間に集中的に営まれた方系墳のみによる古墳群として、この種の古墳群の成立過程を解明する上で注目されるとともに、この地に有力な地域勢力の存在があったことをうかがわせる。また、その金崎古墳群と相対する南側丘陵には馬込山古墳群、貝崎古墳群など多数の方系墳が知られている。後期に入ると、出雲地方の特徴の一つとされる石棺式石室を内蔵する古墳も數多く分布しており、その著例として、東持田町の佐々木亮宅畠中古墳、同野津真宅前古墳、同加佐奈子神社古墳、同加美古墳、上東川津町西宗寺古墳、同菜佐馬古墳などがある。

西川津遺跡は、大略以上のような歴史的環境を持つ川津・持田平野の一角に営まれている。



第3図 遺跡周辺の地形図



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------|
| 1 西川洋遺跡 | 2 タチボ遺跡 | 3 櫻本遺跡 | 4 納佐遺跡 | 5 貝崎遺跡 |
| 6 楽師山古墳 | 7 菅田丘古墳 | 8 小丸山古墳 | 9 宮出古墳群 | 10 萩谷古墳 |
| 11 上羽馬古墳 | 12 金崎古墳群 | 13 宮垣山古墳群 | 14 太源山古墳 | 15 佐々木浅市宅古墳 |
| 16 野瀬真宅古墳 | 17 加美古墳 | 18 加佐奈子古墳 | 19 貝崎市古墳群 | 20 古畠敷古墳 |
| 21 空山古墳群 | 22 馬込山古墳群 | | | |

IV 遺跡の概要

調査対象地は南東隅から北へ20m毎に区切り南から第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳグリッドと仮称した。今回の調査では諸々の事情から第Ⅰグリッドのみの調査に終った。この調査区は、昭和54年に行なった範囲確認のための試掘調査の第Ⅲグリッドを含むところにあたり、その結果によると、地表下1.6mまで掘り下げられたこのグリッドからは、須恵器、土師器、弥生式土器等の出土があったところである。

この調査区の土層は、耕作土の下に茶灰色粘土層、黒茶色粘土層、黒褐色粘土層、暗青灰色粘砂層と続き、地表下1.8m = 海抜0m前後から青色砂層、青白色砂礫層となり、以下黒色粘土層の無遺物層へと続く。これらの各土層はほぼ水平に堆積している。

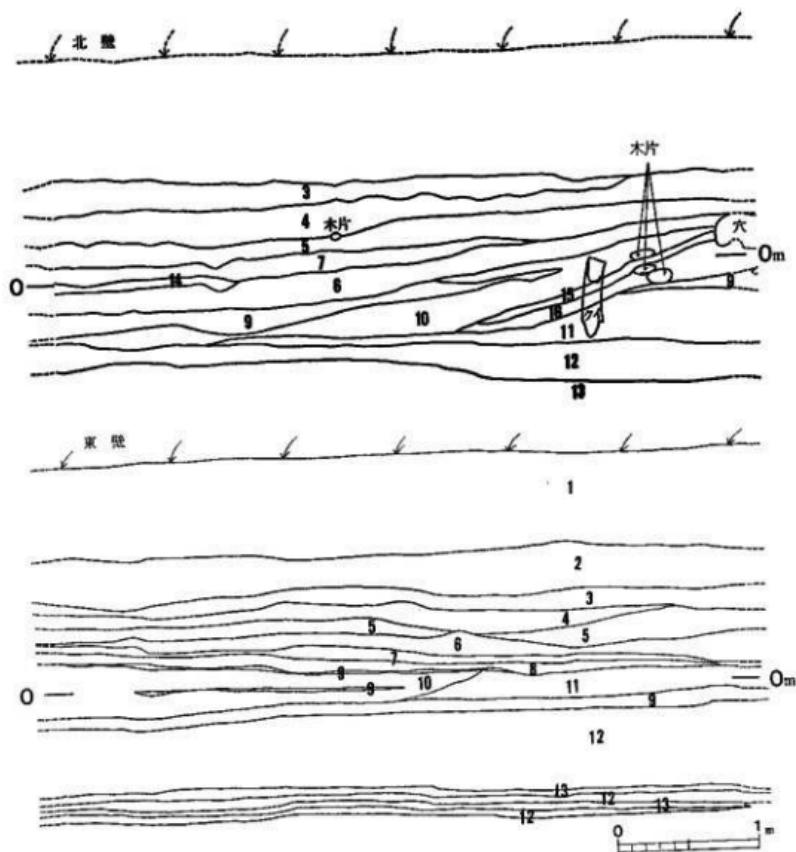
遺物は、ほとんどが、青色砂層、青白色砂礫層に包含されており、上層の暗青灰色粘砂層からも古式土師器など比較的新しい時代の遺物も出土している。遺物は調査区全域にわたって濃密に存在していたが、西側部分では、砂礫層の堆積が浅いことを反映して量的にはやや少なかった。

遺物の主体をなす土器類は、縄文式土器、弥生式土器がほとんどで、包含層の青白色砂礫層の中にぎっしりと詰まった状態で検出された。そして、これらの土器類は、弥生式土器の壺数点を除きほとんどが破片であり、その破面を観察すると多少の崩滅痕がみられ、朝駒川の流れにより、移動があったことをうかがわせた。また層位的にみてみると、各時代、各時期のものが上下混在して出土するという状況をみせながらも、量的な比率では上層から順に古い時代のものへと統いており、青白色砂礫層上面では弥生時代後期の土器が多くあり、下面ではほとんどが縄文式土器という出土傾向を示していた。石器類では、石鎌、石斧、石包丁、紡錘車、砥石などがあり、特に黒耀石の鏡片が数多く出土したことが目立った。

そして、今回のような狭い範囲の調査面積にもかかわらず、多数の木製品の出土があった。木製品は、鍬、鋤の農耕具が最も多く、他に、高環、弓状木製品、鳥形状木製品など、約70点あまりが検出されている。そのほか用途は不明ながらも加工痕、使用痕のある木材も多量にあった。なかには県下初例の出土品も多くあり、各種の遺物の中でも木製品は特に注目を集めた。このように一遺跡から多量の木製品がまとめて出土した例は、昭和52年のタテヨウ遺跡の発掘調査に次ぐものである。その他の人工遺物では、漆器製の櫛2点の出土があった。

また、自然遺物も検出され、クルミ、トチノキ、カシなどの植物種子、果実類が多く、ヤマトシジミなどの貝類、イノシシの歯牙も1点出土している。

このように、多種多量の遺物が出土したのに反して、遺構では顕著なものは検出できなかった。遺構としてはグリッド北側の暗青灰色粘砂層から青白色砂礫層まで打ち込まれた4本の杭列が検出されただけである。



第5図 調査区上層圖

- | | | |
|----------|------------|------------|
| 1 表土・耕作土 | 7 綠褐色砂層 | 13 黑色粘土層 |
| 2 茶灰色粘土層 | 8 黑褐色粘沙層 | 14 淡灰色粘砂層 |
| 3 黑茶色粘土層 | 9 青色砂層 | 15 茶褐色腐蝕土層 |
| 4 茶褐色粘土層 | 10 暗灰色粘沙層 | 16 黑褐色腐蝕土層 |
| 5 黑褐色粘土層 | 11 暗青灰色粘沙層 | |
| 6 暗灰色粘土層 | 12 青白色砂礫層 | |

V 出土遺物の考古学的観察

今回の調査により、狭い範囲の調査区であったにもかかわらず、各種多様の遺物が出土した。それらは、遺構に伴って出土したものではないが、コンテナ約70箱分にも相当する量になった。現場発掘調査の終了後、ただちに整理・報告書作成作業を急いだが、限られた調査体制、期間の制約もあり、遺物全てに渡って検討することができなかつた。

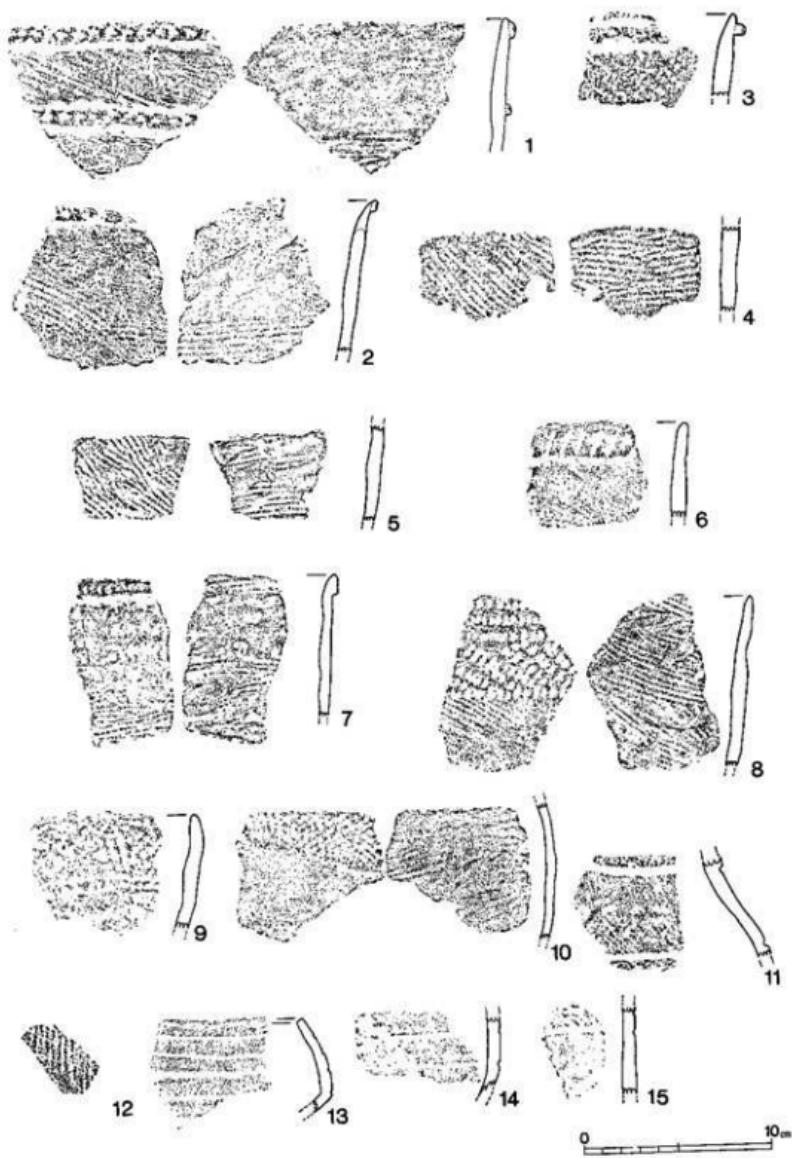
以下、主要なものについて、縄文式土器、弥生式土器、土製品、石器、木製品、その他の遺物の順に項を分けて説明することとする。

1. 縄文式土器

山陰における縄文土器の編年は確立していないため、単一土層出土の遺物を5期に分類することは困難であるが、次のように分けて紹介しよう。

早期の土器（第6図1—5）この期の土器はごくわずかである。文様、胎土等で分類すると、およそ次のとおりである。1…見崩土BⅡ式と思われるタイプの深鉢形土器の一部と考えられる。口縁部に1条ないし2条のはりつけ突帯を有するものである。突帯には、刻目あるいは刺突痕を行する。文様は2枚貝腹縁による条痕の認められるもの、無文のものがある。胎土には多量の砂粒を含むのが一般的であり、また纖維と思われるものの混入が特徴的である。器壁は8mm内外の厚さを行するもので、焼成は良好である。（第6図1—3）2小片であり器形は不明である。文様は表裏に縄文が施される。胎土には小砂粒を含み、纖維と思われるものの混入が認められる。焼成は良好である。器壁は8mm内外の厚さを行する。なお、この小片には補修孔と考えられる孔1がある。（第6図4）3小片であり器形は不明である。文様は表裏に2枚貝条痕が施される。胎土は細砂を若干含み、焼成は良好緻密である。器壁は7mm内外の厚さを行する。（第6図5）

前期の土器（第6図6—11）この期の土器もごくわずかである。文様等で分類すると次のとおりである。1深鉢形土器の口縁で、口縁部に幅広い突帯を有する。突帯には2枚貝腹縁による圧痕が認められる。文様は表に不鮮明であるが条痕が認められ、裏面は無文である。胎土は小砂粒を含み、焼成は良好である。器壁は8mm内外の厚さを有する。（第6図6）2深鉢形土器の口縁部で、口縁部に突帯を行する。文様は表で口縁部突帯から口縁直下にかけて、横方向5列の刺突文が施されている。この刺突文は爪形に近いものである。刺突文の下部及び裏面は2枚貝による条痕が施されている。胎土には砂粒を若干含み、焼成は良好である。器壁は6mm内外の厚さを有する薄手のものである。（第6図7）3深鉢形土器の一部で、単純口縁を有するもの等がある。文様は表裏2枚貝条痕あるいは無文のものに横方向あるいは斜方向に刺突文を施している。刺突文は爪形に近いものである。胎土は若干の小砂粒を含み、焼成は良好である。器壁は7mm内外の厚さを有する。（第6図8—10）4小片であるため器形は不明である。文様は表に条痕を施し凹線を有し、裏面は無文である。月崎遺跡出土のものに類似するという。胎土は小砂粒を多量に含み、焼成は良好である。器



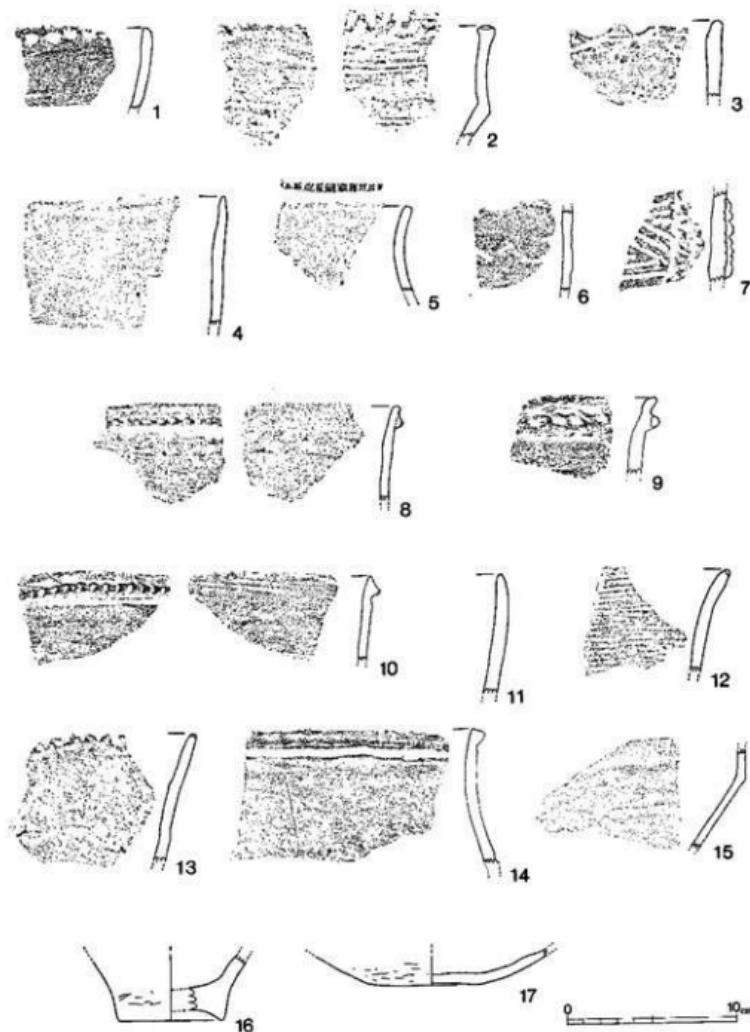
第6図 繩文式土器断面(1)

壁は7mm内外の厚さを有する。(第6図-11)

中期の土器 この期のものは明瞭なものがない。ただ1点図示(第6図12)したものは、小破片であり詳細は不明であるが、撚糸繩文かと思われる。

後期の土器(第6図13-15、第7図1-7)この期の土器もわずかである。文様等で比較的特徴のあるものをとりあげると次のようになる。1浅鉢形土器と考えられる破片である。文様は表に巻貝による縦縞あるいは縦文を施し、一部を磨消しているもので、裏面は磨研あるいは無文のものである。胎土は砂粒を若干含み、焼成は良好である。器壁は総じて7mm前後の厚さを有する。(第6図13-15) 2深鉢形土器、甕等の口縁部で文様は、無文のもの、粗面、条痕をもつものがほとんどであるが、中には裏面に巻貝による刺突痕を有するもの、沈線を有するものがある。口縁部は単純口縁のもの、巻貝による刺突痕を有するもの、ヘラ状工具による刻目を有するもの、波状口縁を有するものがある。胎土は砂粒を多量に含むものが多く、焼成は比較的良好である。器壁は7mm内外の厚さを有する。(第7図1-5) 3小片であり器形は不明である。文様は表で弧状の沈線を有し、裏面は無文である。胎土はやや大粒の砂粒を含み、焼成は良好である。器壁は6mm内外の厚さを有する。(第7図6) 4小片であり器形は不明である。文様は表で沈線及び突帯を有し、裏面は無文である。胎土は砂粒を若干含み、焼成は良好である。器壁は10mm内外の厚さを有する。(第7図7)

晩期の土器(第7図8-17)この期の土器がもっとも出土量が多く、全体の90%以上になる。文様等で比較的特徴のあるものをとりあげると次のようになる。1深鉢形土器の口縁部であり、そこに突帯を有するもので、突帯部に刻目あるいは巻貝による刺突痕を有する。文様は表裏条痕のもの、一部条痕を有するもの、無文のものがある。胎土は大粒の砂粒を若干含み、焼成はおおむね良好である。器壁は8mm内外の厚さを有する。(第7図8-10) 2深鉢形土器の單純口縁で、口唇部に刻目あるいは巻貝による刺突痕を有するものがある。文様は条痕を施すものと、無文のものがある。胎土は大粒の砂粒を若干含み、焼成は良好である。器壁は8mm内外の厚さを有する。(第7図11-13) 3鉢形土器の口縁部である。口唇部は若干肥厚するもので、口縁部は外溝しながら内傾する。文様は表で2条の浅い凹線が施され、全体はていねいな磨研のものである。胎土は大粒の砂粒を若干含み、焼成は良好である。器壁は6mm内外の厚さを有する。(第7図14) 4鉢形土器の脛部である。文様は表で条痕あるいは擦痕が認められるが、内面は無文である。胎土は小砂粒を多量に含み、焼成は良好である。器壁は4mm内外の薄手のものである。(第7図15) 5深鉢形土器または甕の底部である。中凹みのもので、器壁は8mm内外の厚さを有する堅牢なものである。文様は無文であるが、裏(内)面には指頭による圧痕がみられる。胎土には大粒の砂粒を含み、焼成は良好である。(第7図16) 6浅鉢形土器の底部である。平底であるが、若干凹むものである。文様は裏(内)面で荒い磨きのもので、表面は無文である。胎土は若干の砂粒を含み、焼成は良好である。器壁は4mm内外のものである。(第7図17)



第7図 繩文式土器拓影(2)

2 弥生式土器

本遺跡の出土遺物中最も量が多かったのが弥生式土器で、コンテナ約40箱分あった。それらは遺物包含層である青白色砂礫層の中にぎっしりとつまり、縄文式土器、木製品などを伴って出土し、層位的に把握し得る状態ではなかった。又、これらは、壺形土器の一部（前期のもの5個体、中期のもの3個体）を除いてほとんどが破片の状態で出土しており、全てに渡って時期を考えることは困難であるが、口縁部や文様を持つもの、手法のわかるものを手がかりに、大きく前期、中期、後期の三時期に分類した。この結果、圧倒的に前期のものが多く、後期になると非常に数が少なくななるという傾向にあった。

また、大部分の土器片が、破面および器面がかなり崩壊しており、調整や文様の不鮮明なものが多かった。このことは、原位置から移動していることをうかがわせ、調査区の周辺に遺構が存在するか、あるいは、調査区内に遺構が存在し、それが長い年月の間に洪水等によりほとんど破壊されてしまったことと推定される。いずれにしても本遺跡出土の弥生式土器は、出土状況、遺存状態などから原位置を失っているものと考えられ、共伴関係等は不明であるが、以下、各時期、器種別にその概要を記すことにする。

(1) 前期の土器

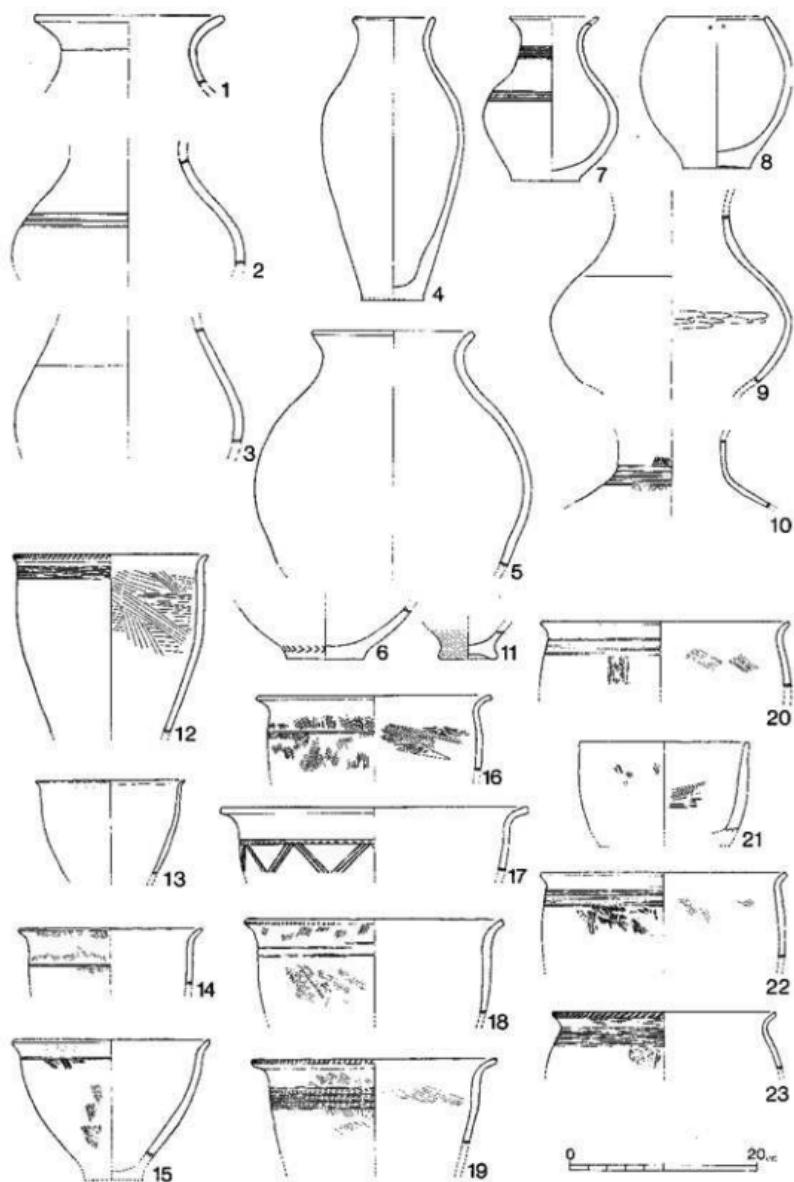
器種として壺形土器、甕形土器、鉢形土器、蓋形土器がある。

壺形土器（第8図1～11）

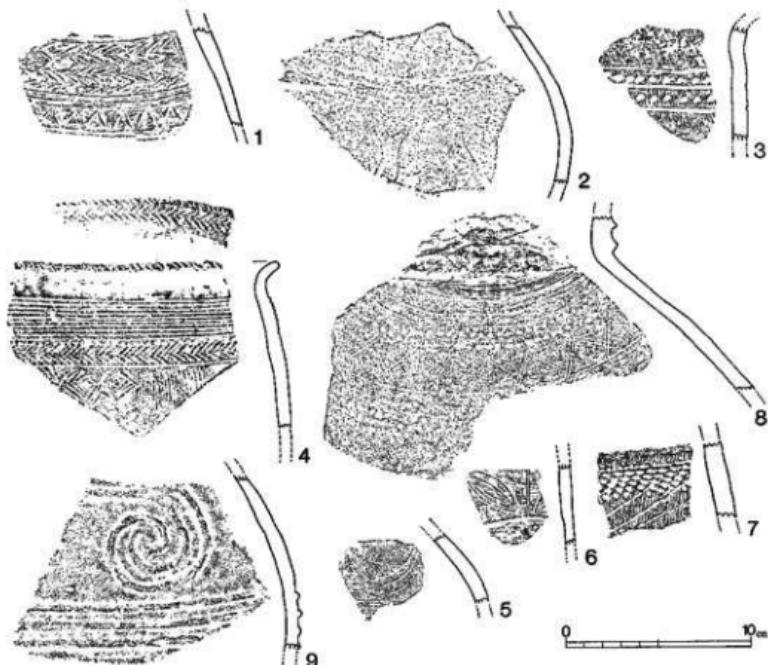
(1)は、やや肥厚させた口縁がゆるく外反し、頸部は「ハ」字状に開いている。口縁と頸部の境にはヘラ描による1条の沈線が引かれている。(2)は、胸部がやや張り、安定したプロポーションをしており3条のヘラ描沈線が頸部と胸部の境に引かれている。(3)は、(2)に比してやや長身で、頸部と胸部の境には段がついており、1条のヘラ描沈線を入れたのち削りとられている。(1)(2)(3)とも、胎土には大粒の砂粒が含まれており、色調は灰色系を呈している。器面については、外面はほとんどがていねいなヘラ磨き、内面は刷毛目のあとナデあるいはヘラ磨きで調整されている。

(4)、(5)、(6)に関しては、(4)は胸部以下が異常に長く発達しており県下ではあまり類例をみないものである。口縁はやすばまる傾向をみせ、最大径は肩部にまで上ってきている。底部は大部分が剥落しているものの厚手に作られている。内外面ともていねいなヘラ磨きによる調整がなされており、外面には肩部から胸部にかけて炭化物の付着が著しい。(5)は頸が短くなり、胴はゆるく張り出している。口縁部は若干の肥厚がある。内外面とも刷毛目のあとにヘラ磨きで調整しており、胎土は砂粒を多く含んでいる。(6)は底部近くにヘラ描による羽状文がめぐらせてあり、この部位での施文はあまり見られない。胎土には砂粒を多く含んでいる。焼成はいずれも良好である。

(7)は口縁の肥厚化はなくなり、胸部最大径が3分の1身上ぐらいのところにあり、安定した形を持ち厚い平底で終る。頸部と肩部にはそれぞれヘラ描による4条の沈線がある。内外面とも刷毛目のあとにヘラ磨きにより調整されている。(9)は頸部と胸部の間に段をつけており、胴



第8図 弥生式土器実測図(1)

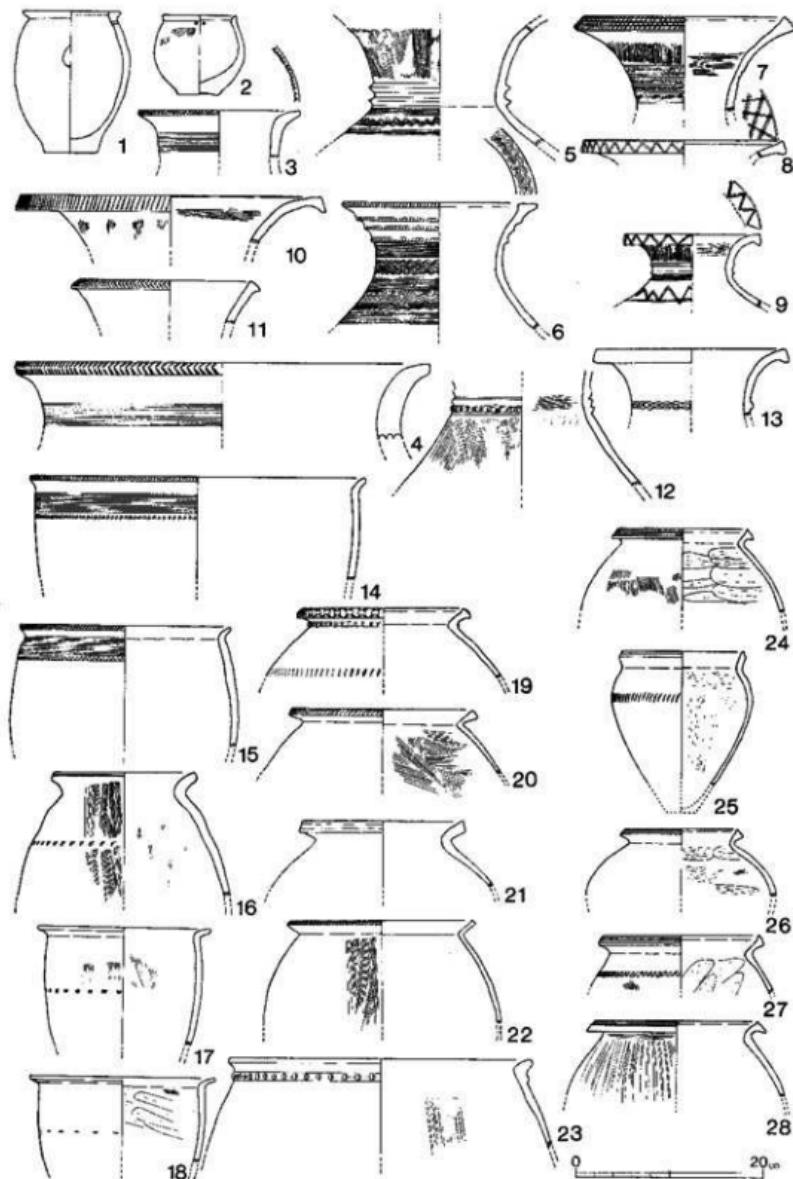


第9図 弥生式土器拓影

部は大きく張り出し全体に安定したプロポーションを示している。内外面とも崩け目のちへラ磨きで調整し、内面胸部に横方向へのヘラ削りがみられる。(10)は器厚がやや薄く、肩部に5条のヘラ描沈線があり、調整は(7)、(9)と同じく内外面とも刷毛目のあるとへラ磨きされている。(8)は前期後葉と考えられる無頸壺で、口縁に2個ずつ1対の穿孔がある。底部がやや内高になっている。内外面ともていねいなヘラ磨きで調整されており、焼成は良好である。(11)は時期不明であるが、一応弥生前期と考えられる壺の底部である。高台を付けたような内くぼみ底を呈しており、胎土には小砂粒と金雲母が含まれている。内外面ともヘラ磨きによる調整があり、特に外面全体には黒光りする漆の塗布がみられ、台の接地部分は使用のため剥落している。祭祀用の壺とも考えられる。

彫形土器（第8図12～14、16～23）

弥生式土器中最も量が多い。小破片が多く中には鉢形土器が含まれているかもしれない。口縁は短くゆるく外反し、ほぼ直線的にすぼまるものと、ややふくらんだのちすぼまり平底におけるものが多い。器面は内外面ともほとんど刷毛目が施されており、胎土には大粒の砂粒を含むものが多い。大きく分けて口縁端部に刻目を持つものと持たないものがあり、刻目のないものの方が3倍ぐらい多くなっている。それには両者とも、無文のもの、頭部に1～9条のヘラ描沈線を入れたもの、



第10図 陈生式土器実測図 (2)

また沈線文にヘラあるいは竹管によって刺突列点文を加えたものなどがある。それは2~4条のヘラによる沈線を描き、この沈線間に列点文を施すものである。(第8図17、19)

鉢形土器(第8図15)

文様、調整等ほとんど壺形土器と同じであるが、形態の面から口径に比して高さの低いものを鉢形土器としてとりあげた。(15)では口縁部外面にわずかの指頭圧痕がみられる。

次に、弥生式土器の施文方法について若干の例を第9図に掲げてみた。壺類では(1)にみられるような、ヘラあるいは貝殻腹縁による羽状文が多くみられ、稀に、ヘラ描による木ノ葉文1例、三重弧文3例などがみられた。(4)は壺口縁部であるが、口縁端部、口縁内部にも貝殻状工具による羽状文、肩部の羽状文の下にも貝殻を用いた菱形文様など、壺形土器にみられるような入念な文様で飾られている。

(2) 中期の土器

器種として壺形土器、壺形土器、高环形土器、蓋形土器などがある。壺形土器(第10図1~13)

(1)、(2)とも頸部に穿孔のある無頸壺で、内外面ともいねいにヘラ磨きされている。(1)は肩部に2.0×2.5cm大の焼成後の穿孔がある。底部はやや厚手の平底である。(2)は若干の内くぼみ底である。(3)、(4)は口縁部がゆるく外反し、端部にわずかな平坦面を持つものである。文様は口縁端部にヘラによる刻目、頸部には横描直線文がめぐらされている。(3)は口縁内部に三角形刺突文が施されている。(1)(2)(3)(4)とともに灰色系を呈し、胎土には若干の小砂粒が含まれており、焼成は良好である。これらは概ね中期前葉の土器と考えられる。

(5)(6)(7)(8)(9)は、口縁部が一旦大きく開いたのちにやや内湾し、口縁端部を上下に拡張しそこに文様を施すものである。文様は櫛状工具による、斜格子文、波状文、斜行文、直線文、刺突列点文などがあり、さらに貼り付け突帯、刻目など、ほとんどが数種類の文様を組み合わせていてぎやかに飾られている。調整面ではほぼ共通し、内面が頸部上方が刷け目のあとナデ、下の部分が刷け日のちヘラ磨き、あるいはナデとなっている。焼成は良く、胎土は緻密で若干の小砂粒が含まれる。これらは中期中葉の頃の土器と考えられる。

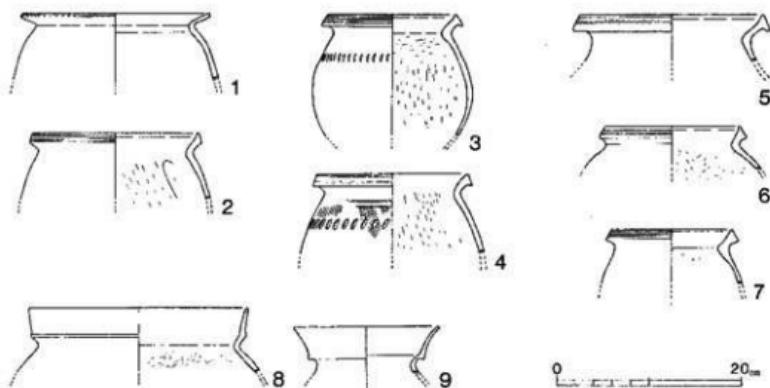
(10)、(11)は口縁部が大きく開き、口縁端部に施文しているものである。(10)は櫛状工具による列点文、(11)は貝殻状工具による羽状文をそれぞれめぐらせてある。頸部以下には文様ではなく、内外面とも刷毛目のちナデである。(10)には刷毛目のあとが若干残る。焼成は良好で、色調は明るい灰色を呈し、胎土には若干の小砂粒が含まれる。

(12)、(13)は頸部に貼り付け突帯を有するものである。(12)は押圧を加えたのちヘラ状工具により凹部に切れ目を入れている。(13)は押圧を加えた貼り付け突帯である。(12)、(13)ともに調整は刷け日の後ナデ、(12)は頸部内面に指頭圧痕が残る。

壺形土器(第10図14~28)

この期の壺形土器は器形にかなりのバラエティーがあり、大きく3つに分つことができる。

壺A(第10図14、15)は形態として前期のものとほとんど変るところなく、口縁部がゆるく外反し、肩部があまり張り出さないものである。文様は横描直線文が主流で、これに加えて口縁端部に



第11図 弥生式土器・土師器実測図

刻目、三角形列点文、波状文などを施したものがある。内外面とも刷毛目調整を行なうものが多く、焼成は良好で、若干の砂粒を含んでおり、色調は白灰色系を呈する。

壺B（第10図16、17、18）は口縁部が「く」字状に折れ、胸部がやや張り出すものである。無文のものが多いが、中に、頸部中位にヘラ、櫛、貝殻状工具等により刺突列点文をめぐらすものもかなりある。調整は口縁部はナデ、胸部外面刷毛目、内面刷毛目のあとナデを行なっているのがほとんどである。また、全体的に器厚が薄くなる傾向を示している。胎土は緻密で焼成は良好、色調は灰色系を呈する。

壺C（第10図19～22、24、26～28）は口縁部が「く」字状に折れて端部が上下に拡張し、肩部が強く張り出すものである。これらは口縁端部に2～4条の凹線を入れたもの、その上に斜行文、円形浮文等を入れたもの、刻目を入れたものなどがある。さらに頸部に指頭圧痕帯を入れたもの、胴上部に櫛、ヘラ、貝殻痕などで列点文を配するものもある。これらは外側は刷毛目、あるいはそのあとにナデ、内面は刷毛目のあとナデという調整を行なうものが多い。また内面にヘラ削りを行なっているものもある。これらは総じて器厚が薄く、胸部では6～8mmぐらいを測る。胎土は緻密で焼成は良好である。

高坏形土器（第12図1～4）

4点出土し、いずれも坏部が失われた脚部のみの破片である。（1）は4条からなる櫛状工具によって脚部上部から9本の直線文があり、その下に縦に非常に鋭利なヘラ状工具によってほぼ5mm間隔で沈線が入る。胎土は緻密で、焼きも良い。破面に透しらしい痕跡も見える。（2）は脚部に三角形状の通しを2段に持つものであり、下段は内側に貫通しているが上段は内面まで入っていない。外側はヘラ磨き、内面はナデにより調整されている。（3）は脚裾が外反し、その端部に2条の凹線文をつけたものである。外側は刷毛目のあとナデ、内面もナデによる調整がある。（4）は脚裾がスクート状に広がるもので、外側はナデ、内面はヘラ磨きされている。

蓋形土器（第12図5、6、7）

甕用蓋形土器とみられ、笠形で大きく外へ広がる。(5)は内外面ともていねいなヘラ磨きで、頸部には凹線が入る。(6)は内外面ともヘラ磨きで、つまみの部分の外側に指頭圧痕が残る。(7)は内外面ともナデによる調整がある小形のもので、つまみ部分が大きくなっている。これらの中には前期あるいは後期のものも含まれている可能性もあるが、一応ここで一括してとりあげた。

(3) 後期の土器（第11図1～7）

器種として蓋形土器、甕形土器があるが、その区別はあまり明確ではない。

甕形土器（第11図5）

口縁部をやや内傾して拡大させ、頸部は「八」字状に開くものである。口縁部には2条の凹線が入る。外面は不明瞭な刷毛目、内面は横ナデ、頸部以下にはヘラ削りがなされている。胎土には1～2mm大の砂粒が若干含まれており、焼成は良好である。

甕形土器（第11図1～4、6～7）

口縁部の形態から大きく2種に分けることができる。

甕A（第11図1）は口縁部が「く」字状に折れ、肩部がわずかに張り出すものである。口縁部の拡張はないが、1条の凹線が入り、その下方に刻目がある。内外面とも刷毛目があとていねいなナデにより調整されている。胎土は0.5mm大の砂粒を含み、焼成はややもろい感じを与える。

甕B（第11図2～4、6～7）は口縁部が複合口縁状に拡大していく傾向を持つもので、頸部が「く」字状に短く折れ、胸部の張りが目立つものである。口縁部外面はほとんど例外なく多条の沈線を入れ、その上をナデで仕上げている。肩部にヘラ、貝殻状工具による刺突列点文を入れるものもある。外面はうすく刷毛目が残り、内面は口縁部ナデ、頸部以下はヘラ削りで、器厚を薄く仕上げている。総じて、胎土は1～3mm大の砂粒を著しく含み、色調は褐色系を呈するが、外面に炭化物が付着しているものが多く見られる。

3 土 師 器

（第11図、8～9）

縄文式土器、弥生式土器などに比べ、土師器の出土量はきわめて少なかった。弥生式土器などは

主に青白色砂礫層から出土したが、土師器はその層よりも上の暗青灰色粘砂層から出土し、この層に生活面があったと考えられる。全部で10数点出土したが、いずれも小さな破片が多く、復元し得るものは2点しか検出できなかった。その結果、その2点のものはいずれも「5」字状の複合口縁を有する古式のタイプの壺形土器である。

(8)は口縁と頸部のなす破が不明瞭な複合口縁をなすもので、口縁はやや外傾気味にたら上がるるものである。口縁部内外面ともナデ、頸部以下の内面はヘラ削りにより調整されている。肩部はかなり張り、倒卵形をなし丸底で終るものとみられる。灰白色の明るい色を呈し、焼成も良好である。

(9)は整正な複合口縁を持ち、口縁は外傾し開き気味にたらあがり、優美な感じを与える。口縁部内外面ともヨコナデ、頸部以下の調整は不明である。内面は黄白色で、外面には炭化物、もしくは黒色塗料とも思える黒色の物体が器面全体にある。胎土は緻密で、焼成も良い。

4 土 製 品

出土量は少ないが、纺錘車、土錘、土玉がある。

纺錘車（第13図1、2）

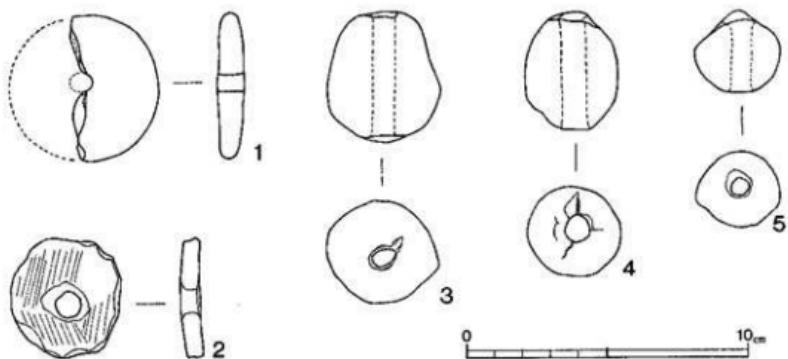
(1)は当初より意図して作成したもので、径は5.2cmを測り、器内は1.0cmほどあり、中央部に径0.6cmの大の孔がある。非常にていねいに仕上げられており、外面はナデられている。胎土は1~3mm大の砂粒を若干含み、灰白色を呈する。焼成も良好である。半分足らず欠損しているが、残存部だけで18gを測り、約30gぐらいの重量があったと推定される。(2)は弥生式土器の破片を利用したもので、径は約4.0cm、器内は0.6cm~0.7cmを測る。周囲は荒く削られ不整形であり、中央に約0.8cmの孔が穿たれている。胎土は密で、焼成も良好で、暗褐色を呈しており、弥生中期の壺形土器片の転用と推定される。重量は14.2gを測る。

土錘（第11図3、4）

土錘は3個出土している。時期は不明であるが、形は卵形状、楕円状をなしている。(3)は西洋梨形を呈しており、重量も60.5gとかなりの重さを持っている。胎土は小砂粒を含み、明灰色で、焼成は良好である。断面は円形に近い楕円形で、中央には0.6~0.8cm大の孔がある。高さ4.6cm、径4.0cmを測る。(4)は卵形状のもので、重量50.9gを測る。断面はほぼ円形である。胎土は2~3mm大の砂粒が含まれ、明灰色の色調で、焼成は良い。高さ4.1cm、径3.3cm、中央の孔は0.8~0.9cmを測る。(3)、(4)とも外面はナデにより調整されている。

土玉（第11図5）

1個出土した。ほぼ球状をなし、径は3.0cm前後、重さは19.7gを測る。胎土は緻密で焼成は良く、明灰色を呈する。孔は0.6cmを測る。



第13図 土 製 品 水 測 図

5. 石 器

本遺跡から出土した石器類は、石鎚、石斧、石包丁、砥石、紡錘車、石錐などの種類があり、最も量が多かったのは石鎚であった。また剣片、石核なども多数出土し、これらを合わせるとその全重量はコンテナ3箱分にも相当する。以下、石器の種類別に主なものについてその概略を記すことにする。

石鎚（第14図1～16）、本遺跡からは、完形、破損品、未成品を合わせて16個の石鎚が出土した。石材はほとんどが黒曜石で、他にサヌカイトも2点（13、14）用いられている。検出された石鎚は全て無茎の石鎚であり、それらは基部の形状によって凹基式と平基式の2種に分類される。

凹基式（1～8、10～12、14、15）、いずれも三角形鎌で、基部の抉りは浅いものと深いものの2種が認められ、両側縁は直線的なものが多く、8、12のようにゆるくカーブを描くものもみられる。調整加工は両面調整を基本とし、縁部周辺には特に入念に行なわれている。

平基式（9、13）、2点検出された。凹基式と同じ三角形鎌であるが、他に比較して厚い。

未製品（4、16）全体の形、縁部の調整などに未調整な部分を残すものであり、石鎚の制作過程を知る上で興味深い資料である。

なお、石鎚については、個々の石材、法量型式等は別表に示したとおりであるので参照されたい。

石斧（第14図17、第15図6）2点検出された。第14図17は、いわゆる太型始刃の磨製石斧である。刃部は両面から研ぎ出されているが使用の為の刃こぼれがみられる。全長13.6cm、横幅4.6cm、刃角62°を測る。第15図6は扁平片刃の局部磨製石斧である。基部は欠損するが、現存長8.7cm、刃基部幅5.7cm、刃角は32°を測る。

石錐（第14図18）暗青灰色粘砂岩からの出土である。両先端部を打ち欠き、そこから中央部に溝をついている。全長10cm、横幅5.5cmを測る。

石包丁（第15図1～5）、すべて青白色砂礫層からの出土である。完形のものではなく、ほとんどが縫通し孔のところから欠損している。石材は、きめの細かい真岩質のものを用いている。形態的には、(1)、(2)、(5)が半月形直線刃、(3)が半月形外脛刃、(4)は形態は不明だが、内側刃とそれ推定される。刃部は両方向から研ぎ出された両刃のものが多く、(4)だけ片刃となっている。縫通し孔は例外なく、両方向から穿たれている。

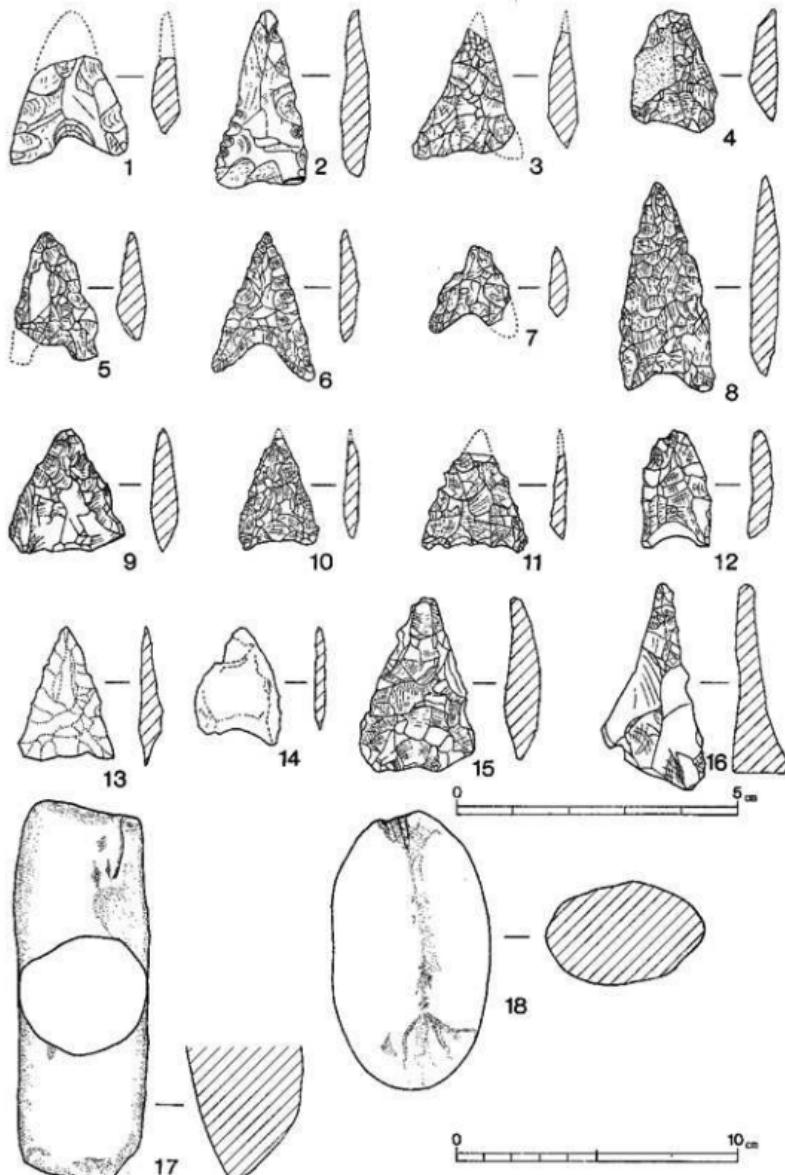
縫縫車（第15図7、8、9） 青白色砂礫層から3点検出された。(7)は、未成品と思われ、縫部に擦り切り痕を残している。石材は砂岩質の頁岩を用いている。中央には両方向から孔が穿たれる。(8)(9)は完形品で、ほぼ円形を呈する。(8)が厚手で径は4.8cm、(9)は薄手で径は5.5cmを測り、中央には両方向から孔が穿たれている。

これらの石器のはかに、砥石2点、各種石器の未製品なども検出されている。圓面揭露はできなかったが、砥石は2点ともきめのこまかい砂岩を使用し、直方体を呈する器面の側面をすべて研磨面に利用し、その面の内側は使用の為の著しくほみがみられる。大小2点あり、大きいもので、縦約6cm、横約15cm、高さ約7cm、小さいもので、縦約5cm、横約8cm、高さ約4cmをそれぞれ測っている。そのほか、橢円状の砂岩を利用した磨石があり、両端部に使用痕が認められる。未製品では、石包丁のものが多くみられ、頁岩質の石材を厚さ0.5cm内外に薄く削り、その後、縫部に擦り切りの痕を残すものが多い。

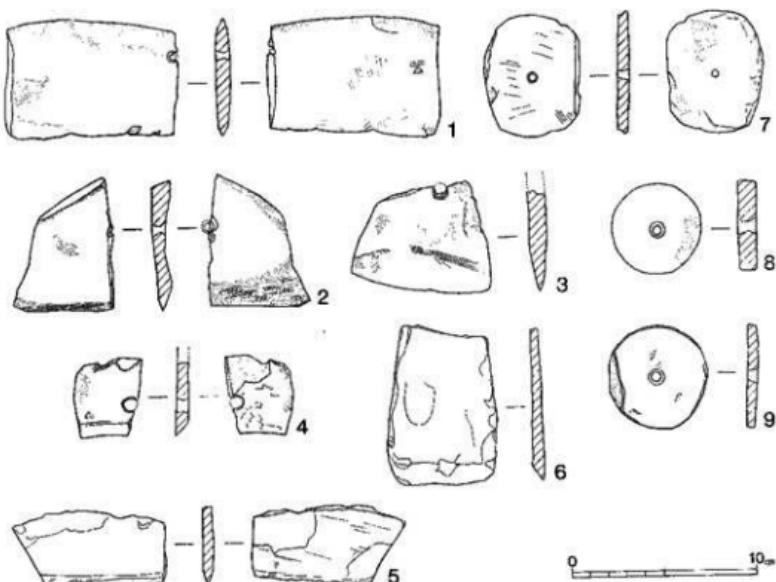
今回得られた石器は多岐にわたり、種類も豊富である。しかし、前述したようにどの時期の土器

表1 石 器 一 覧 表

種別 番号	型 式	材 質	長 さ (cm)	幅 (cm)	重 量 (g)	出 土 地 点	備 考
1	四基式、三角形	黒耀石	残存長 1.3	基部 2.1	1.55	AK 102.1砂礫層	先端折損、風化著しい
2	タ	タ	全 長 3.0	* 1.5	1.68	不 明	風化著しい
3	タ	タ	残存長 2.1	最大 1.6	1.42	AK 102.4砂礫層	先端・基部折損
4	タ	タ	全 長 1.9	基部 1.5	1.69	AK 102.4	タ
5	タ	タ	タ 2.0	最大 1.5	1.18	AK 102.2	タ
6	タ	タ	タ 2.0	基部 1.8	1.03	AK 102.4	*
7	タ	タ	タ 1.2	最大 1.2	0.47	AK 102.1	タ
8	タ	タ	タ 3.3	基部 1.6	2.23	AK 102	不明
9	平基式 タ	タ	タ 2.1	* 2.0	1.68	AL 103.4砂礫層	先端折損
10	四基式 タ	タ	タ 1.8	* 1.4	0.64	AK 102.2	タ *
11	タ	タ	残存長 1.6	* 1.8	0.98	AK 102.2	タ
12	タ	タ	全 長 1.9	* 1.2	1.10	AK 102.2	タ
13	平基式 タ	サスカイ ト	タ 2.4	* 1.6	1.13	AL 104.4	タ
14	四基式 タ	タ	タ 1.8	* 1.5	0.61	AK 101.1	タ
15	タ	黒耀石	タ 3.0	* 2.0	3.37	AK 102.4	タ
16		タ	タ 3.4	* 1.8	3.25	AJ 102.1	タ 未製品



第14図 石器実測図 (I)



第15図 石器実測図(2)

に伴うものであるかはっきりしない状況で出土しているので、時期的な検討はさけることにした。また、当地方の石器の研究は1部を除いてあまり報告されたことがない状況である。ここでは、石器についての大略について述べ、詳しい時期検討や、形態的な究明は今後の課題とし、後日に構を譲ることとした。

6. 木製品

今回の発掘調査により出土した多くの遺物群の中で、特に注目されたのは百数十点にもおよぶ加工木材、木製品であった。これまで県下において、木製品が一遺跡からまとまって出土したという例は、昭和52年のタテヨウ遺跡の発掘調査につぐものであった。これらの木製品は様々な労働用具や生活用具など多岐にわたっているものであった。しかしながら、これらのうち完形に復し得るものは僅かであった。それは、もともと木材という材質が軟弱であること、更に、調査区一帯が朝駒川の流路の影響を受けやすいところにあるという点など、これらのことことが木製品の原形を損なう大きな原因になったであろうと推定される。

調査で得られた木製品については、形態や加工痕、使用痕、樹種、木取り法などの面から推測し、用途別に労働用具、生活用具に分類することにした。労働用具としては、鋸、鉋、横槌、弓などがあ

あり、生活用具としては高坏などがあげられる。

特に、農耕具の鋤、鎌類は30点あまり出土しており、その量の多さが注目をあつめた。また、高坏、鳥形状木製品など、県下では他に類例をみないものも出土しており、貴重な資料となるものもあった。このほかに、形態や使用痕などから推してもその用途を明確にし得ないものがあり、これらは一括して用途不明木製品とした。

なお、本製品としたものは、木材を一定の目的をもって加工したものとし、選別した。以下、労働用具、生活用具、その他の木製品の順にしたがって説明することとした。

(1) 農 工 具

鋤 (第16図1~11、第18図1)

鋤は25点あまり出土しており、すべて青白色砂礫層から検出された。そのうち未完成品2点、舟形突起などの部分品もみられる。完成品の多くは器面が磨耗しており、加工痕が観察しにくい。

多くは突起部をつくり出しているが、突起部が明瞭に段をなさず、なだらかに隆起するものもある。柄の残る例は一例あり、身の部分は周囲が欠損しているが、柄は全長84.0cmを測る。柄のないものについては、柄孔からみて、着柄された柄の断面は円形、あるいは梢円形と思われる。また、柄は鋤身に対して鋸角に着柄されたと考えると、すべてが突起部をつくり出さない面にのびることになり、その着柄角度は60°~85°を測っている。

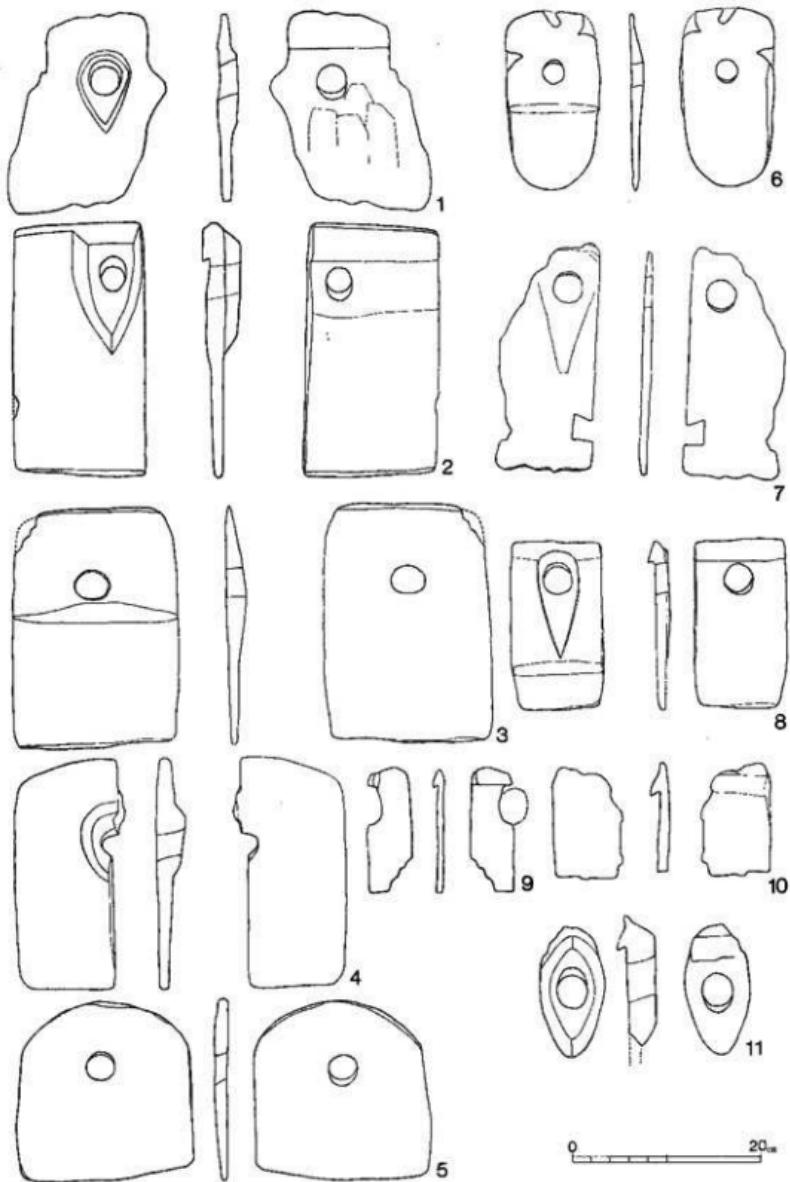
樹種はすべてがカシ類で、縦木取りで柾目材を用いている。完成品をみると、形態、大きさなどにバラエティーがみられ、鋤身の平面の形から次の5つに分類できる。

鋤A (第16図1) は平面が凸形で、刃部が広がる状態をなす広鋤である。突起部は0.7cmときほどの厚みを持たない卵形をなすものである。柄孔は頭部よりに穿たれ、縦長の梢円状を示す。刃縁から身表 (突起部のない方、以下同様) にかけて焼け焦げている。鋤身全長20.0cm、着柄角度68°を測る。

鋤B (第16図2、3、8) は平面形が長方形を呈するものである。

(2) は鋤身を3分の1ほど欠損している。舟形突起は頭部先端より削り出し、逆三角形を呈し、幅と厚みを減じながら鋤身中央で終る。柄孔は頭部よりに穿たれ、梢円形を示す。着柄角度76°で、鋤身全長17.0cm、刃縁の厚さ0.9cmを測る。木取りのためか身表を内側にやや反りがある。刃縁が切り取ったままのような状態で、加工の痕がみられないところから、完成を間近にした未完成品とも思える。(3) は突起部がなく、柄孔に向けてだんだんと隆起させている身表を持っている。柄孔は3分の2身長ぐらいのところにあり、横長の梢円形状を示す。身縁は左右ともに鋸角的に削られている。鋤身全長25.5cm、幅17.8cm、柄孔部分で厚さ2.1cm、刃縁部分で0.8cmを測る。着柄角度が85°とほぼ直角に近い。(8) は小形のもので、鋤身長は18.0cm、身幅9.7cmを測る。舟形突起は0.4cmとほんどなく、先端部が欠損している。柄孔は頭部に穿たれ、断面はほぼ円形を呈する。

鋤C (第16図4、5) は頭部が弧状をなすものである。これらは身表が段を持たず、フラットな面を呈する。(4) は鋤身が半分欠損しており、卵形の舟形突起を削り出している。縁部は鋸角に削り、縁から刃縁部のすみを丸く削り取る。身表の刃部には若干の使用痕がみられる。鋤身長24.5cm、



第16図 木製品実測図(1)

着柄角度68°を測る。(5)は身の最大厚が頭部にあり、それより刃縁に漸次うすく削られている。鍔身長19.1cm、身幅18.3cmとなっており、他の鍔と比べ幅広く作られていることが目立つ。着柄角は60°を測る。

鍔D(第16図6)は小判形状をなし、刃縁がまるくなり縁は鋭くうす手である。身裏は鍔C類と同じくフラットな面をなし、身表は柄孔が隆起している。頭部は角丸形をなし、丸鍔のタイプとも思える。柄孔は 2.3×2.5 cmのほぼ円形で、着柄角は72°を測る。

鍔E類は図面掲載ができなかったが、カシ類の木を用い、横木取りによって作られた大形の横鍔が1点出土している。(図版16-2参照)

(7)は頭部から刃部にかけてほぼ同じ厚さを持つ鍔で、舟形突起らしい痕跡がかすかにみられるものであり、全体に焼け焦げている。柄孔は頭縁に近いところに穿たれ円形をなす。着柄角は84°を測る。3分の1ほど削れているがその後に焼けているので、使用のあと割れ、焼いたとも考えられる。鍔身は現存長で24.3cmを測る。

(9)、(10)はいずれも鍔身2分の1ほどを欠損した小形の鍔である。身裏にはやや幅のせまい段がつくが、身表の舟形突起や降起は明瞭でなく、身厚も比較的薄手のつくりである。(10)は鍔身中央より頭部縁にかけて反りがみられる。

(11)は舟形突起だけ残存しているものである。鍔身は欠いているが、身裏には段を削り出している。突起部の厚さは3.0cmを測り、ほぼ中央に穿たれた柄孔は 4.2×3.2 cmの梢円形を呈し、着柄角は71°を測る。

第18図(1)は柄付鍔である。鍔身は周囲が欠損しているが、柄の部分は全て残る。鍔身の厚さは0.9cmと薄いのに比べ舟形突起は3.5cmの厚さを持っている。身裏の段は柄とはほぼ平行につけられ、柄と1.3cmの間隔をもって削り出されている。柄はカシ材を用い、全長84.0cmを測り、頭から手前に細くなり、断面は綫長の梢円状を示す。身からは2.5cm出る。

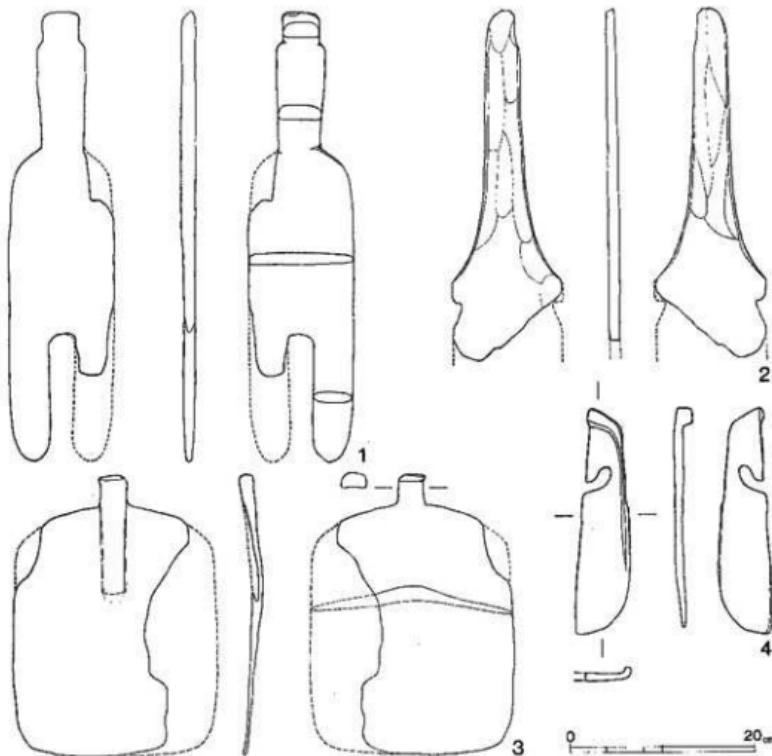
図面掲載できなかったが、未成品の鍔が2点出土している。1点は身表の突起、身裏の段が削り出されているもので、もう1点は第16図(5)に類似したものであり、両者とも柄孔はあけられていない。他には舟形突起の破片等がある。(図版16-2参照)

鍔(第17図1~4)

暗青灰色粘砂層より1点(2)、青白色砂疊層より3点、計4点出土している。いずれもカシ類の縦木取りで柵目材を利用している。身の形態はそれぞれ異なるが、どれも柄と身を組み合わせる着柄鍔の類である。

(1)は叉鍔で、断面レンズ状の刃先が平行して伸びるが一方は欠損している。身に対してやや幅広で断面カマゴコ形の着柄軸がついている。2段から構成されており、その段と身肩の段との2ヶ所に切り込みを入れ、緊搏に工糸をこらしている。全長48.5cm、身幅1.5cm、着柄軸14.5cm、叉先13.8cmを測る。

(2)はいわゆるナスピ形鍔といわれるものに形態が類似しているが、鍔身が欠損している。扁平な板材を用い、厚みはほとんど変らず、鍔身の部分がわずかに厚くなっている。着柄軸にはていねいな隅切りが施され、削りの痕が良く残っている。



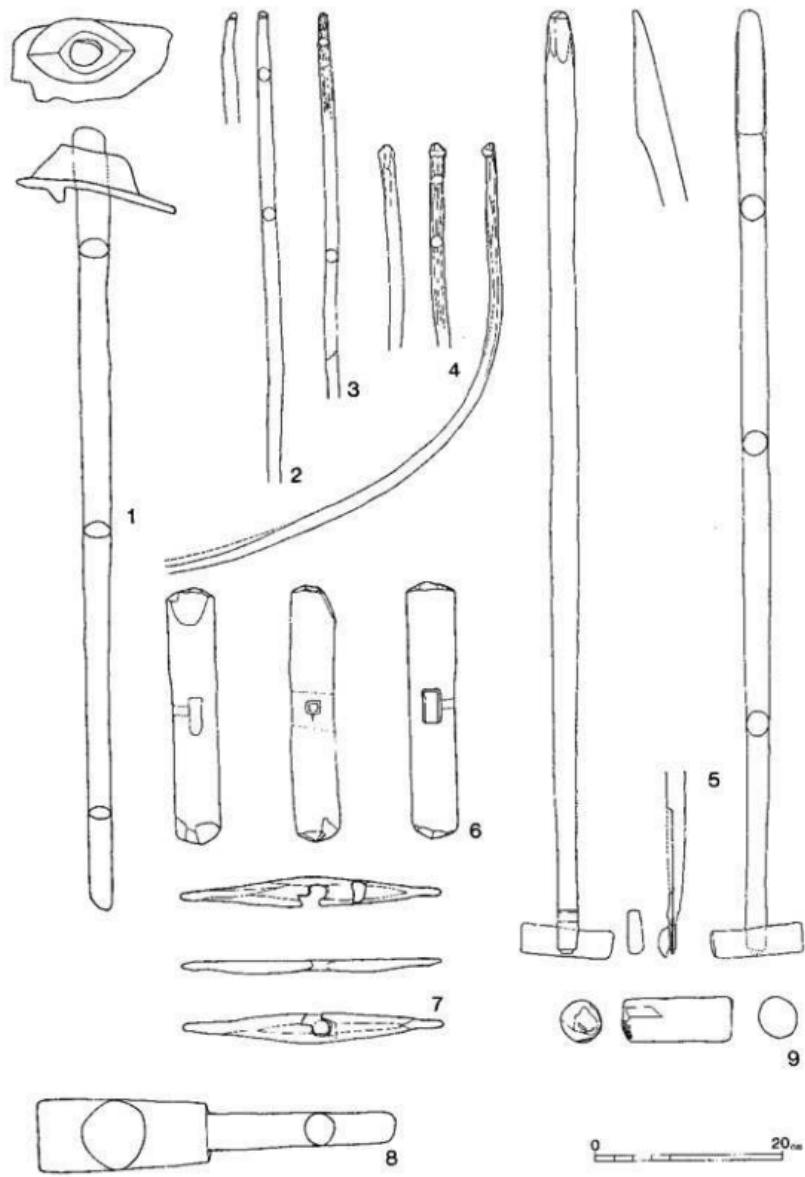
第17図 木製品実測図(2)

(3) も着柄鋤である。鋤身が3分の1ほど欠損しているが、着柄軸から肩がなだらかに下がり両縁が平行し、刃部はわずかに湾曲する縁を持つものである。3.4cmほどある着柄軸の基部より幅2.5cmの着柄溝を鋤身の中央部まで割り込み、更に鋤身内部へ1.0cmの深さで抉り込むが、着柄孔はあけられていない。鋤身は後面を内側にして反り、肩部、刃縁も後面を内にして内傾する。前面は荒削りの感が残るが、後面はきれいに削り込まれ、磨かれたような感を呈する。全長30.4cm、径元幅22.0cmを測る。

(4) は鋤身の3分の1が残るものである。刃縁を鋭利に削り、後面の肩から削り出しの縁を持つ。前、後面ともていねいな仕上げで、後面は刃部が内傾する。現存長24.3cm、現存幅5.7cmを測る。

鋤柄状木製品(第18図、5)

カシ類の総木取りによってつくり出し、組み合わせ式把手を持つものである。断面はほぼ円形をしており、先端部へいくにしたがい径が増し、柄先基部が最も太くつくられている。柄先は18°



第18図 木製品実測図(3)

の角度を持ってフラットに削られ、端部は反対面にも削りがみられる。把手は長さ10.0cm、径3.5cmほどのケヤキ材を円柱状につくり、中央にホゾ穴を開けたものを嵌め込み、更に、ホゾに1.6×4.6cmのうすいクサビ板を打ち込むという入念さで組み合わせている。全長101.3cm、柄の中間径2.5cmを測る。

弓状木製品（第18図、2～4）

(2)は樹種不明であるが、(3)、(4)はカヤを用いる。いずれも芯持ちで小枝をきれいに面取りしている。(2)は2分の1以上欠損するが、端部に幅0.2cm深さ0.1cmほどの溝状の彫り込みが認められる。端部が削られ細くつくられているほかには著しい加工の痕はみられない。現存長57.4cm、径1.5cmを測る。(3)は先端部を10cmほど椿円状に成形し、端部より1cmのところに両様より切り込みを入れるものである。樹種はねぼりのあるカヤ材を用い小枝はきれいに面取りしてある。現在長41.0cm、径1.5cmを測る。(4)は、カヤ材を芯持ちにより削り出したものである。先端より23cm程は芯を中心とする漏形状に成形し、それ以下は、小枝を面取りしているが、大部分は削れてきている。先端部には亀頭状の突起を削り出している。全体に反りがあるが、自然の為か使用によるものか不明、全長65cm、径1.5cmを測る。(2)、(3)、(4)とも、他の遺跡から出土した弓の類例に比べると径が細いことが指摘されるが、ここでは一応弓状木製品として取り扱った。

把手状木製品（第18図、6）

櫛あるいは鋸などの柄の上端部に接着されたと思われる把手で、暗青灰色砂礫層からの出土である。芯持ちの木取りによって円柱状を呈する。ほぼ中央にやや不整形の柄孔が貫通し、それに直交する方向から木釘が打ち込まれており、把手の柄の固定の様子を示している。木釘はその孔からして、断面が方形なものを使用したと思われる。また、柄孔の長辺間にクサビを刺し込んだ痕跡もみられ、木口はナタ状工具によって入念に面取りが施されている。全長27.4cm、径4.8cmを測る。

横槌（第18図、8）

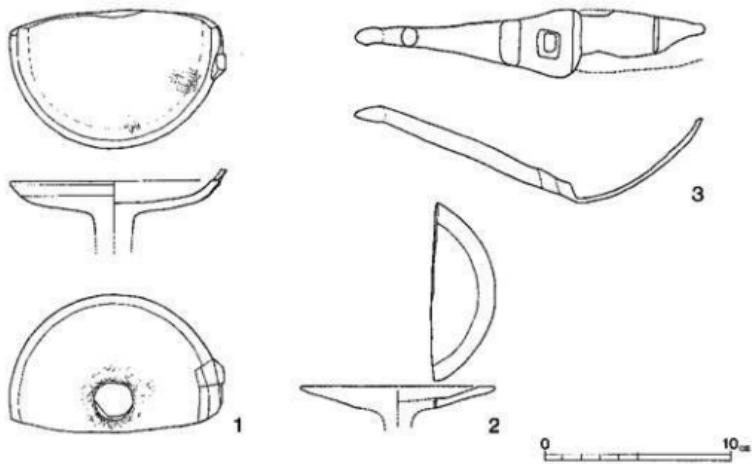
青色砂層からの出土である。日のつんだカシ類を擬木取りによって削り出している。槌部と柄部は同一材の一木づくりである。槌部は先端部が径7.8cm、柄に近い部分で6.2cmとなっており断面はほぼ円形である。柄部も断面は円形をしており端部の径がやや小さくなる。槌部長18.0cm、柄部長20.0cmを測り、やや柄部が長く槌部の先端は、多少内くぼみ状になっている。槌身にはところどころナタ目状の浅い切り込み跡が入る。なお、現在この地方では、柄の短い横槌が使用されている例が多い。

槌状木製品（第18図、9）

暗青灰色粘砂層の比較的浅い層からの出土である。木日のつんだ杉材を柾目取りで、円柱状に仕上げてある。片方の木口は、ていねいに切断されているが、もう一方の木口は鋸状工具によって切り込みを入れた後、折られている。全長10.6cm、円形をなす断面の径は4.6cmを測る。

レンズ状有孔木製品（第18図、7）

両端部をレンズの断面状に削り出し、中央に椿円形の孔を有する用途不明の木製品である。中央部の断面は凹形をなし、両先端部の断面は円形をなす。全長22.8cm、中央幅3.2cm、厚さ1.4cmを測る。



第19図 木製品実測図(4)

(2) 生活用具、その他

高環(第19図、1~2)

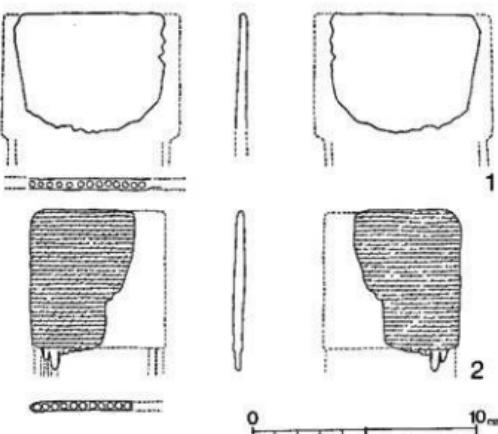
2点出土している。いずれも環部が2分の1ほど残り、脚部以下は欠損している。木目の密なケヤキ材を縦木取りで削り出している。ロクロが使用された痕跡はみられない。

(1)は、環部が5分2ほどと、脚上部2cmほど残して欠損しているもので、暗青灰色粘砂層より、上下逆になりややかたむいた状態で出土した。環部底面が次第に内擣しながら立ち上り、上端でやや外反して終り、外側は口縁部に後を作り出し段をなすものである。大きな皿状の環部は径22.6cmを測り、器厚は0.9cmでほぼ同じ厚みをもつ。形は、ほぼ円形であるが口縁部に削り出しの把手が形成されている。把手の全形は欠損しているが残存部から方形でブリッジ状の把手がついていたものと推定され、装飾的意味を持つものと思われる。環部の内外面とも刃幅5mm内外の細い彫刻刀状の工具による削り痕が残る。脚部は環部外底面のほぼ中央に一木づくりにより削り出されている。2cmほど残っているが、径がすばまり脚台部分で広がるものと推定される。径は4.2cmを測る。

(2)は、環部が3分の1ほど残るもので、青白色砂礫層からの出土である。ケヤキ材を柾目取りしたもので非常に幅の狭い木目が平行に走っている。全体に浅い皿状を呈し、口縁は上部に1.5cm幅のフラットな面をつくり出している。推定径21cm、器厚0.7cm、現存高2.4cm、内底高1.3cmを測る。器面はかなり磨滅しているため削り痕などは明瞭でない。ここでは一応高環として取り扱ったが、底高が少いこと口縁に幅の広いフラットな面を有することなどから、蓋状の木製品の可能性もあり、今後検討を要するものである。

鳥形状木製品（第19図、3）

青白色砂礫層からの出土で、カシ材を柾目取りによって用いている。頭部を亀頭状に削り出し、それより頸部から脇部にかけて、二等辺三角形状を呈する。頭部断面は梢円状、頸部は等脚台形状を示す。脇部には長方形の孔が穿たれ、ここに棒状の柄が差し込まれていたのではないかと推定される。尾部は脇部上面を更に削り、0.5cmほど非常に薄手の厚さに削られている。上面に向って反っており、表面はていねいに削られている。



第20図 漆器実測図

頭部長3.1cm、頸部から脇端部まで22.5cm、尾部現存長16.0cmを測り、頭部最大幅1.9cm、頭部2.1cm、脇部最大幅7.3cmを測る。頸部から脇端部にかけての身厚は2cmではなく同じ厚みを持つ。脇端部に穿たれた孔は、下面で $2.0 \times 2.5\text{cm}$ 、上面で $2.5 \times 3.1\text{cm}$ となっており、脇身に対し、 63° の角度を持っている。尾部は薄く削られているために周辺部が欠損しているが推定幅7.5cmを測るものと思える。

7. その他の遺物

漆器（第20図1・2）

青白色砂礫層から検出され縄文時代晩期の土器が比較的多く検出された地点で出土したものである。2点に共通していることは、いずれも板状のもので、内側に竹ヒゴ状の歯が挿入されている点である。この点から櫛と考えられる。

(1)は、外面は両面とも朱漆が塗布され、朱色を呈する。内側には竹ヒゴと思われる断面円形の歯が挿入されており、それを外側からつまみ込むようにつくられている。頂部を残し他の周辺部が欠損しているが、歯は13本が残っている。頂部は直線を呈している。厚みは頂部が0.3cm、下部は0.5cmで、現存長5.2cm、幅6.7cmを測る。歯はほぼ0.2~0.3cmである。

(2)は、(1)に比べややあざき色を呈するもので、表面に漆の塗布があり、ここでは中に挿入された歯を固定するために巻かれたと思われる糸の巻痕が明瞭に浮き上がっている。歯は11本現存する。頭部頂まで挿入されている。これも完形ではないが、頭部は縦6.1cm、横現存長は4.7cm、厚さ0.5cm、歯の断面径は0.3cmを測る。(1)では歯の間隔がやや空いていたのに対し、(2)のは歯の間隔がつんでいる。

VI ま と め

以上、昭和55年度朝鈴川の中小河川改修工事に伴い実施した西川沖遺跡の発掘調査についてその概要を記してきた。本遺跡は、ここより約800mほど下流に所在するタテヂウ遺跡にも匹敵する大低湿地性遺跡で、縄文時代から古墳時代にわたる各時代の各種多量な遺物が出土した。十分な調査体制もとのわざ、出土遺物についてもその質量にみあう整頓と考古学的な観察が行なわれないまま印刷に付きなければならなくなり、内容的に不備な点の多いものとなってしまった。それらの点をおことわりした上で、以下、今回の調査で得られた成果についてまとめたい。

まず、本遺跡は、朝鈴川の現河川敷、水田一帯を中心として南北に800m、東西に200mぐらいの範囲で広がっているものと推定される。今回の調査結果から知られるように各種の遺物は現水田面約1.8m～3.0mの砂礫層中に混在した状態で含まれ、しかも土器類はほとんどが小さな破片の状態であり、その破面には摩滅痕がみられた。このことは、遺跡の周辺に所在する各時代の遺跡群が、朝鈴川の氾濫等により、たびたび流失し、そのなかで各種の遺品がこのあたり一帯に集積し、堆積をくりかえしていったことを推定させる。

遺物は、青白色砂礫層に至ってから、足の踏場もないほどの状態で各種のものが検出され、弥生式土器の前期のもの、木製品の新資料が相当量得られたことは今回の調査の成果のひとつにあげられる。しかし、既述したようにこれらの遺物は、堆積土層との層位的な関係はみられないものが大半であった。

まず、縄文式土器では、中期の土器が検出できなかった。このことはタテヂウ遺跡の場合と同じで、興味深い成果のひとつである。

弥生式土器は今回得られた遺物の中心をなすもので特に前期のものが多かった。前期の土器の中には、削り出し突堤や木ノ葉文を持つもの、また器形などの面から、畿内方面とかかわりがあったことをうかがわせるものも認められた。

次に、今回の調査で特に注目された木製品があげられる。得られた各種の木製品は、明確な時期は把握できないものの70点にもおよぶこれらは、資料的に県下でも比類のないものというべきものである。そのなかでも、鉤、鎌は30点も検出され、農耕具の占める割合の大きいことが目立つ。このことは、石器においても石鎚に次いで石包丁が多くみられることと符合しており、調査区の近いところに農耕生産の場があることを暗示するものであろう。なお、木製品については、今後の課題として、樹種未鑑定のものの検討や、類例の増加を待って、明確な時期判定、具体的な用途の究明を行なう必要がある。

石器では、石鎚は2点のサスカイト製を除き黒耀石が使用されており、この時期の交易状況を知る上で興味深い資料といえる。

今回は、当初予定していた面積の3分の1の調査を終え、残りについては来年度調査を実施する方針が決定している。今後の調査については今年度の反省をもとに、十分な調査体制、取り組みのなかで調査に臨みたいと考えている次第である。

図版 1



1. 西川津遺跡周辺の航空写真



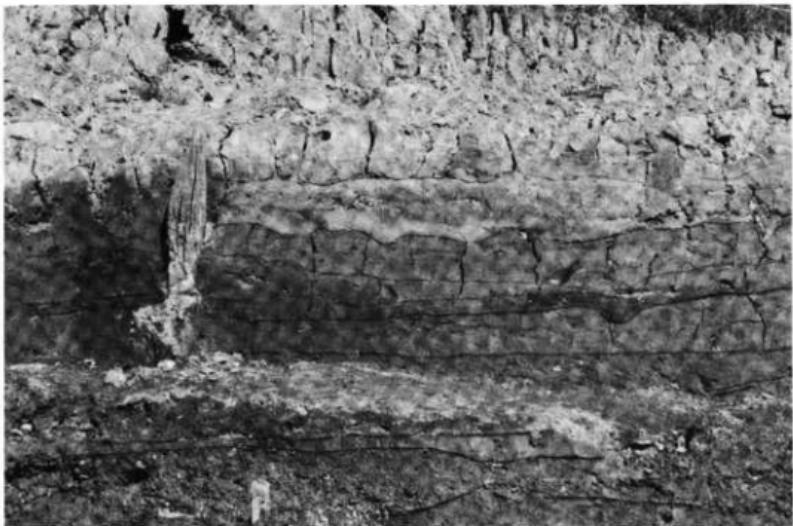
2. 遺跡遠望（東から）



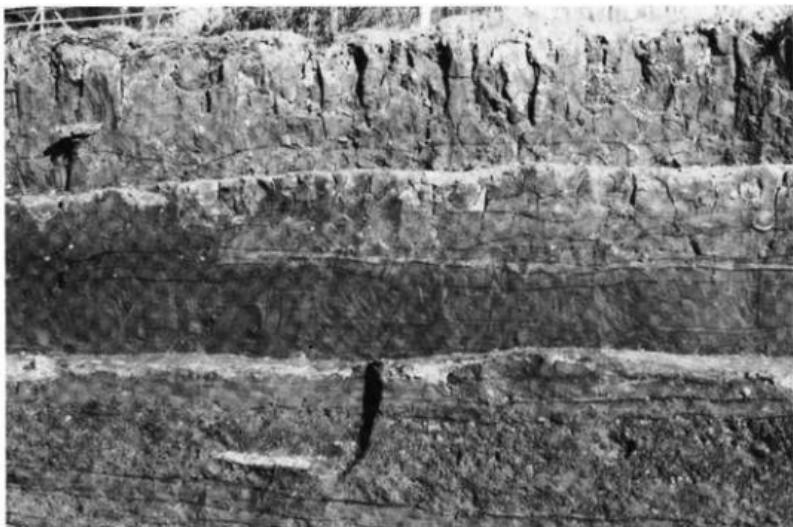
1. 発掘前の状況（南から）



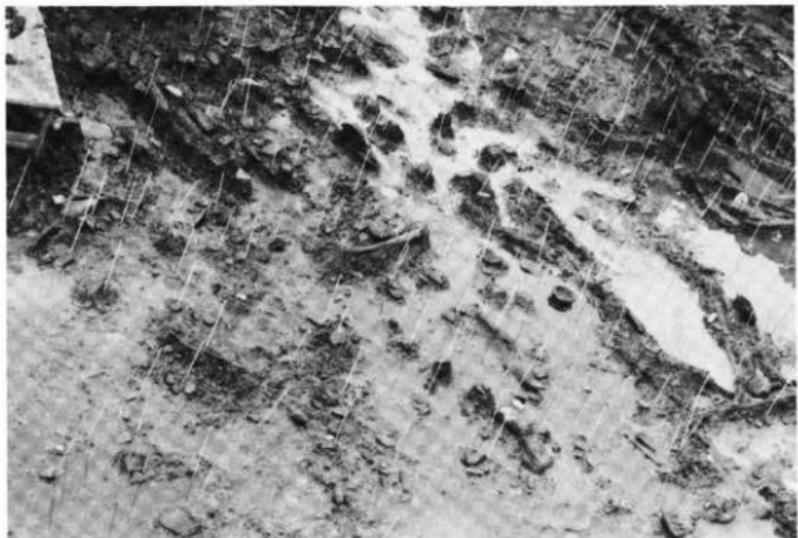
2. 発掘風景



1. 北壁の土層



2. 東壁の土層



1. 遺物出土状況（白棒が遺物の位置）



2. 遺物出土状況

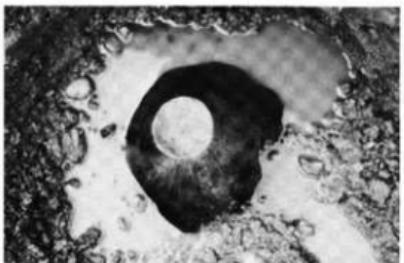
図版 5



1. 繩文式土器出土状況

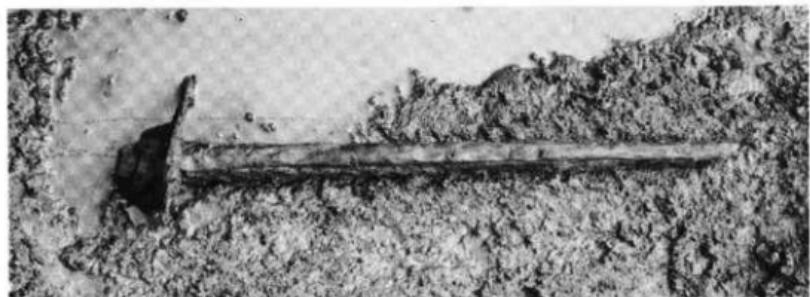
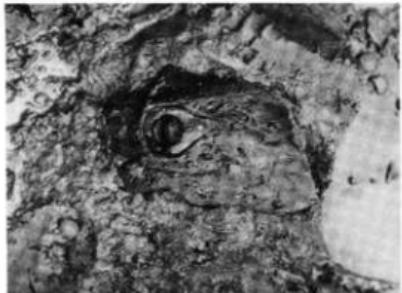


2. 石器出土状況



3. 弥生式土器出土状況

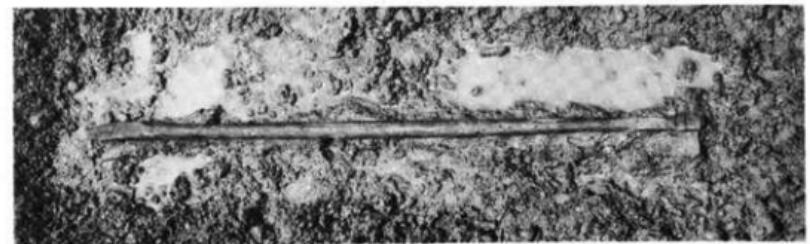




1. 銅出土状況

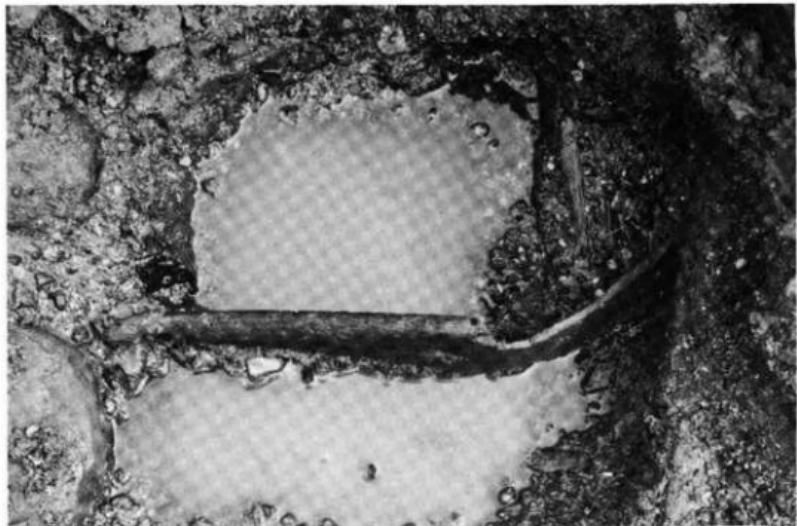


2. 鋼出土状況



3. 柄状木製品出土状況

圖版 7



1. 鳥形状木製品出土状況

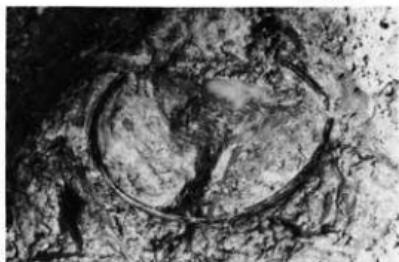


2. 木製高環出土状況

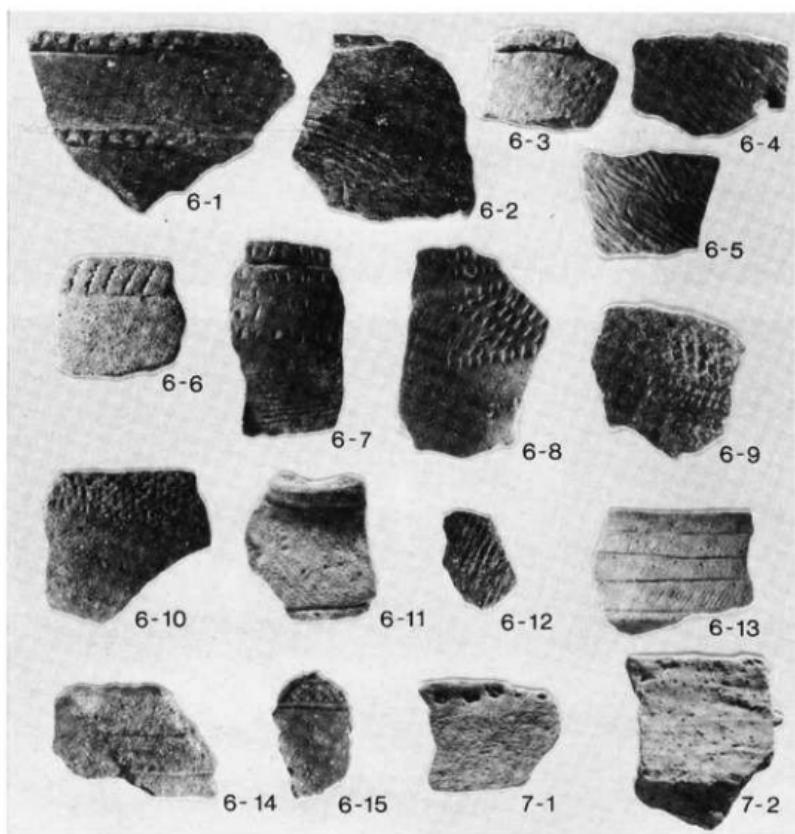
図版 8



1. 横様出土状況

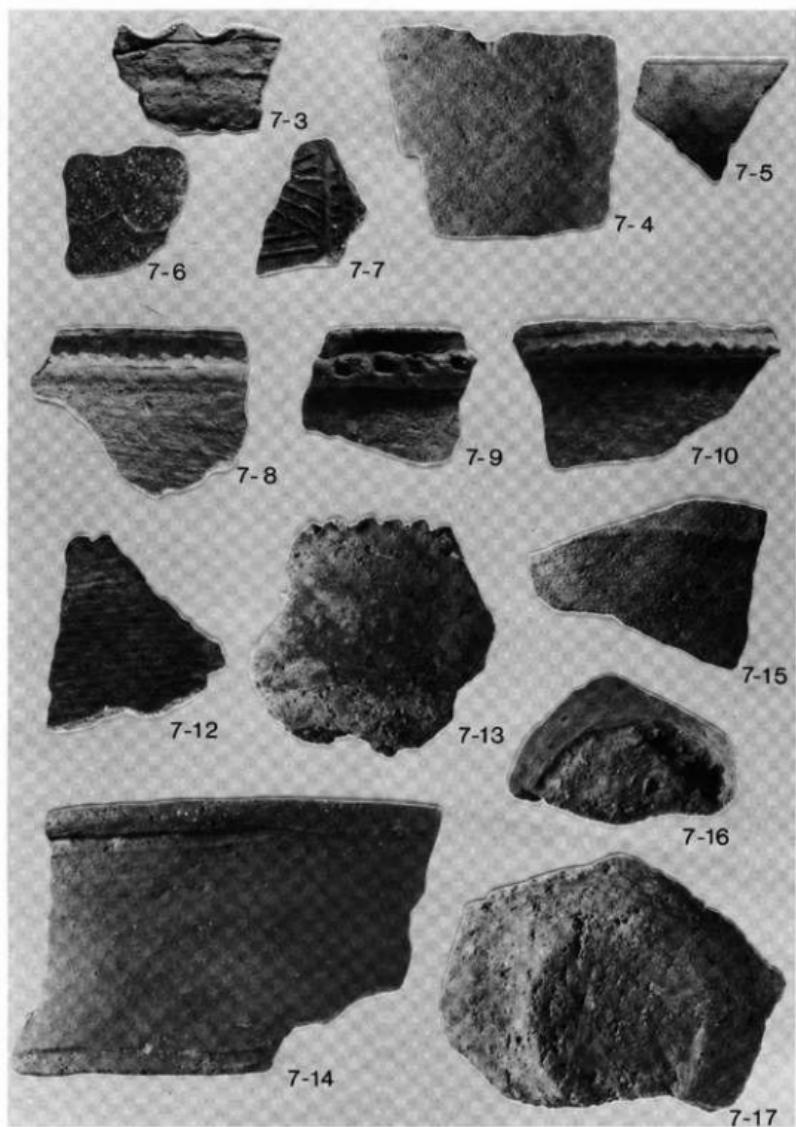


2. 魚籃形木製品出土状況



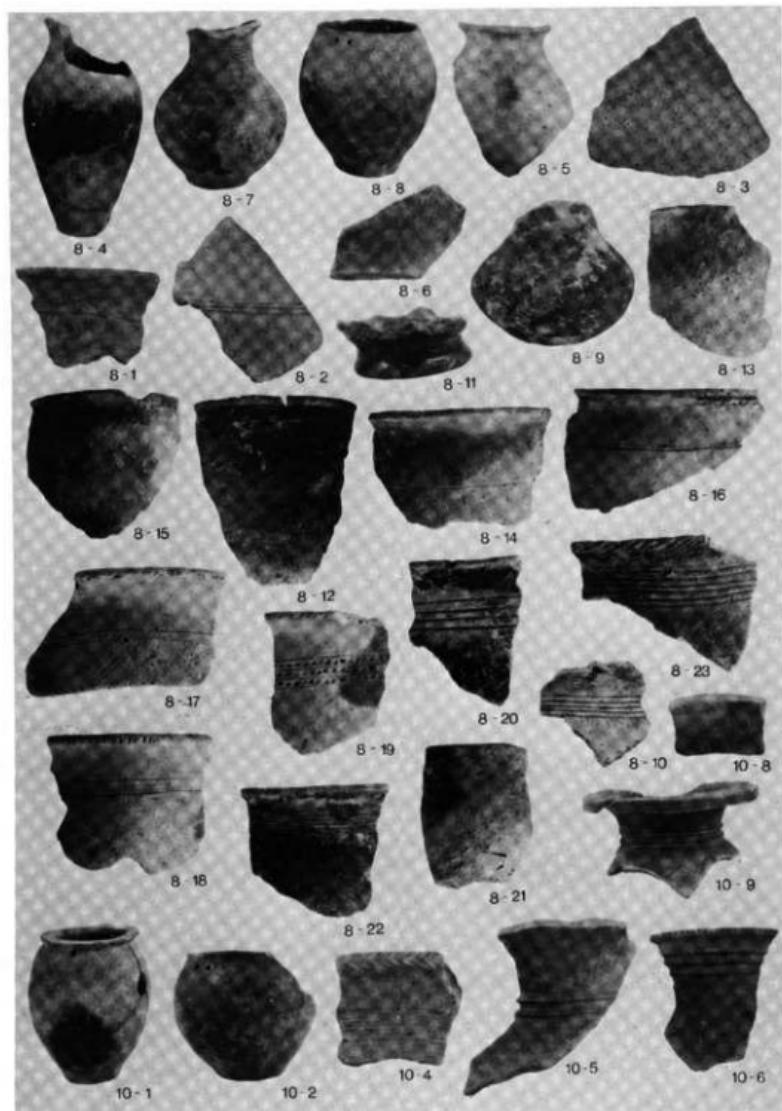
3. 繩文式土器（遺物写真は縮尺不統一、以下同様）

図版 9



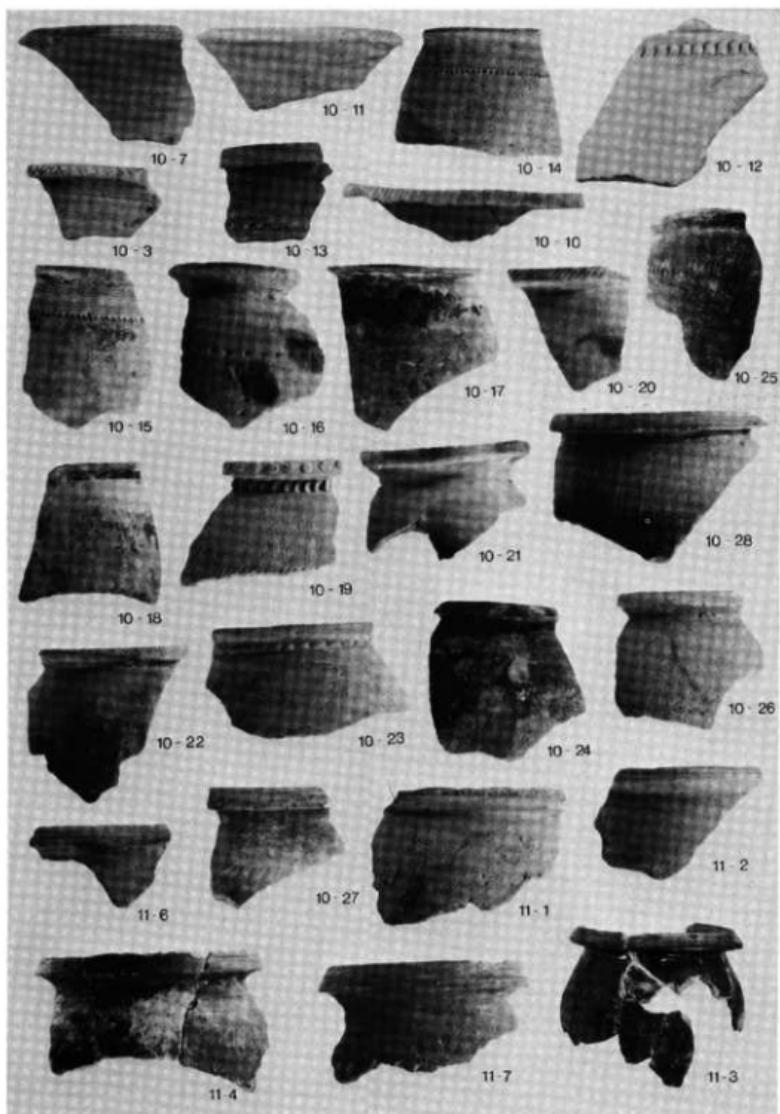
綱文式土器

図版10



弥生式土器

図版11

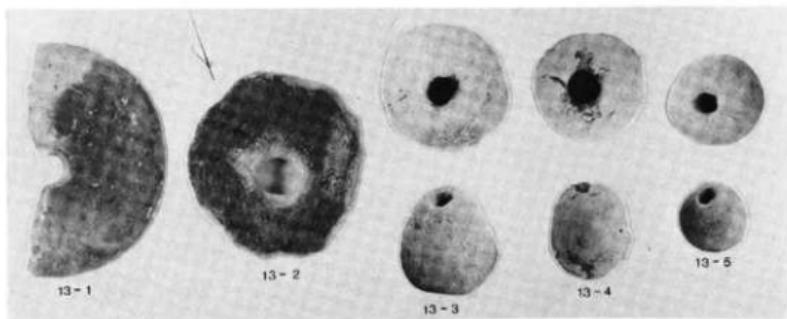


弥生式土器

図版12

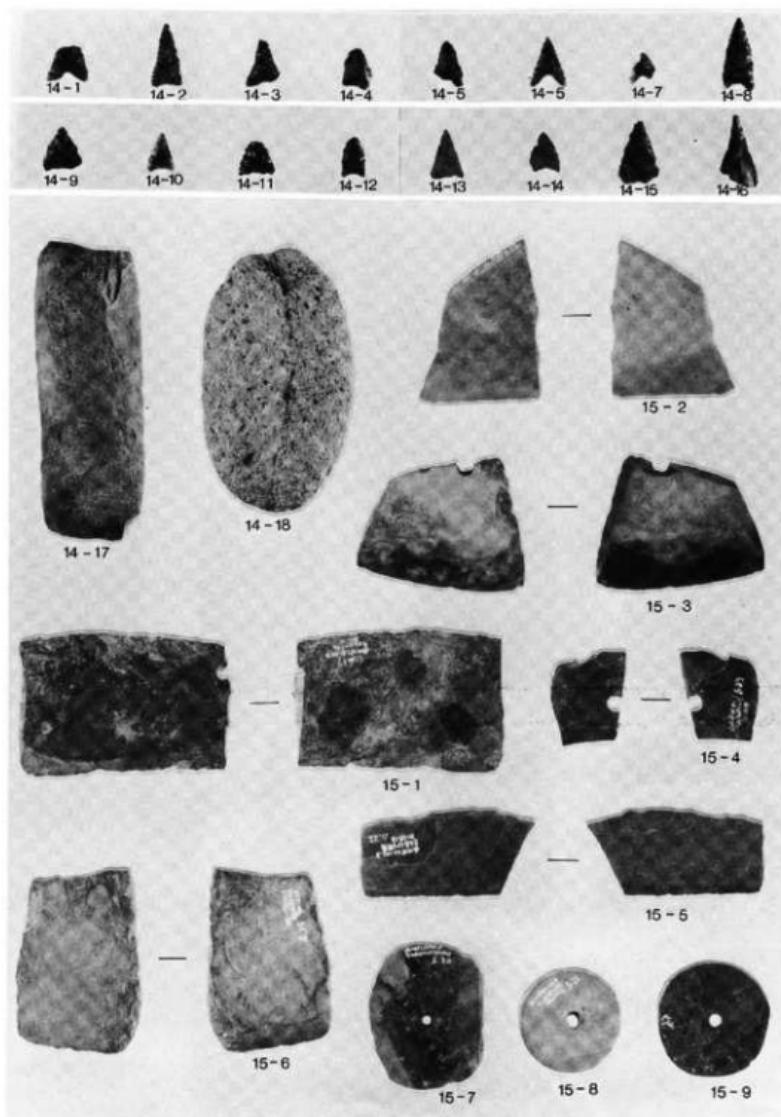


1. 弥生式土器



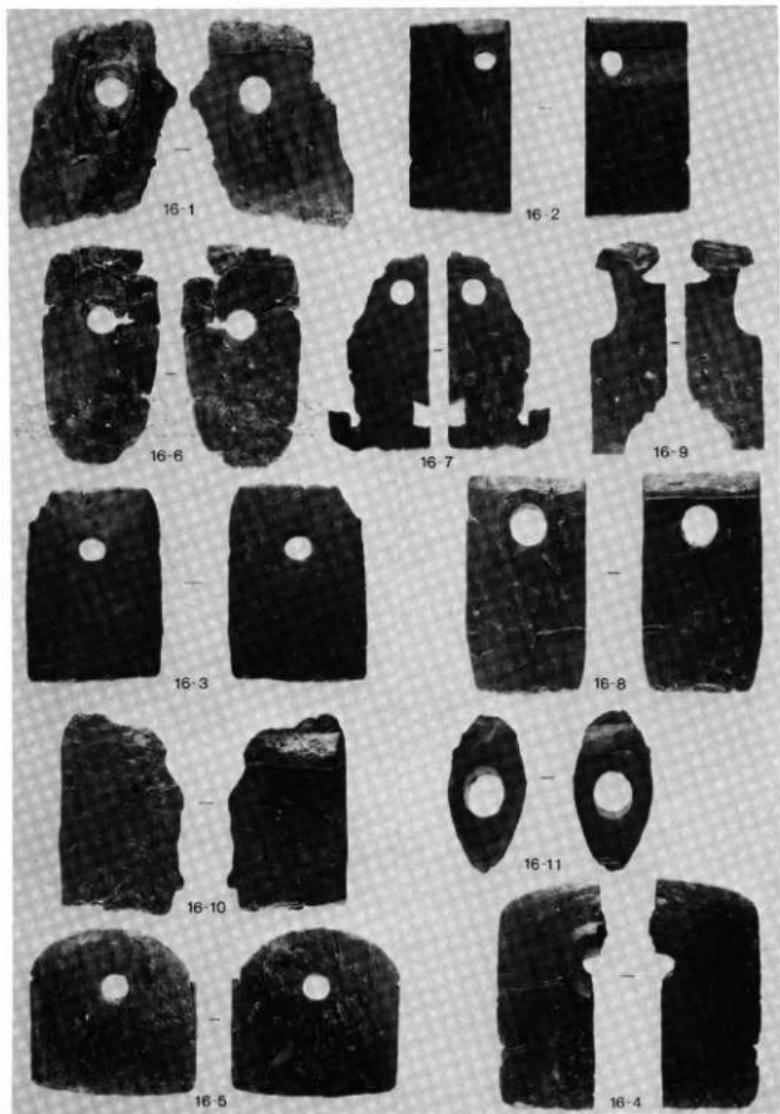
2. 土製品（土鏡、土玉、紡錘車）

図版13



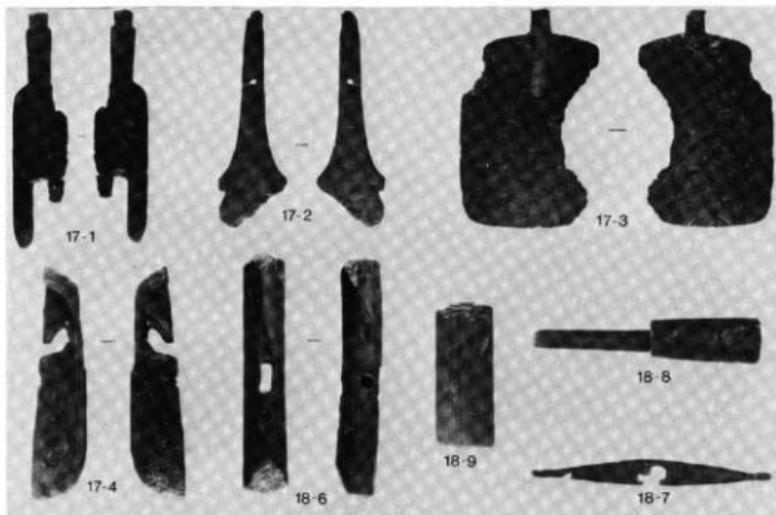
石器類

図版14

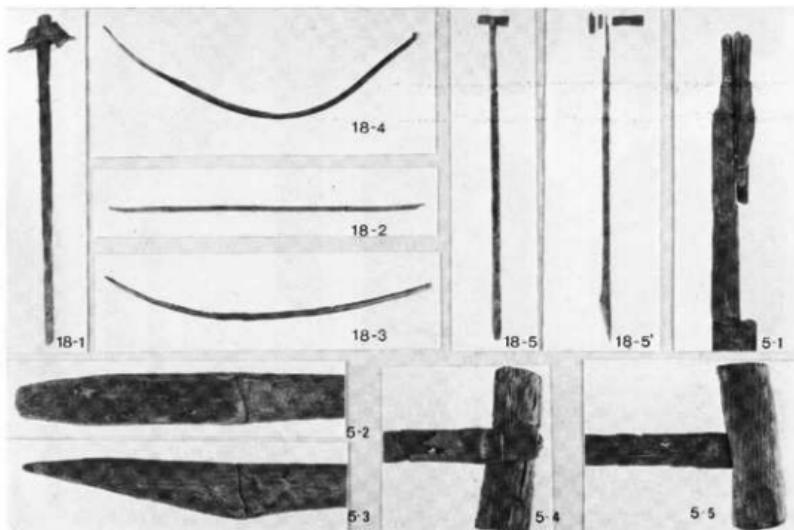


木 製 品

図版 15

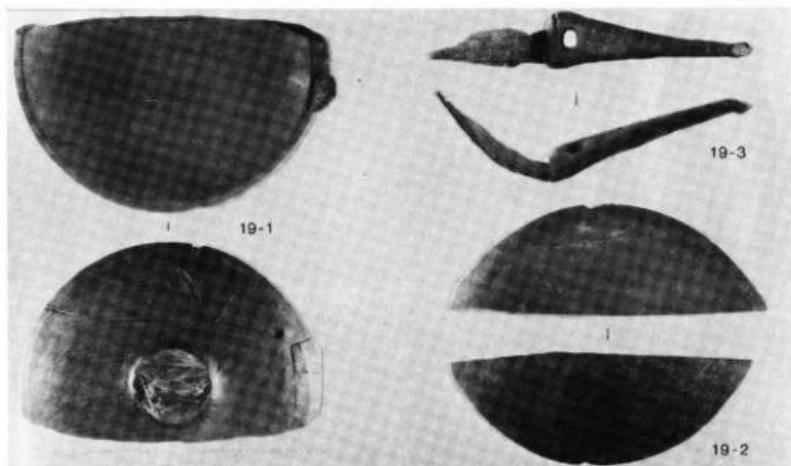


1. 木製品

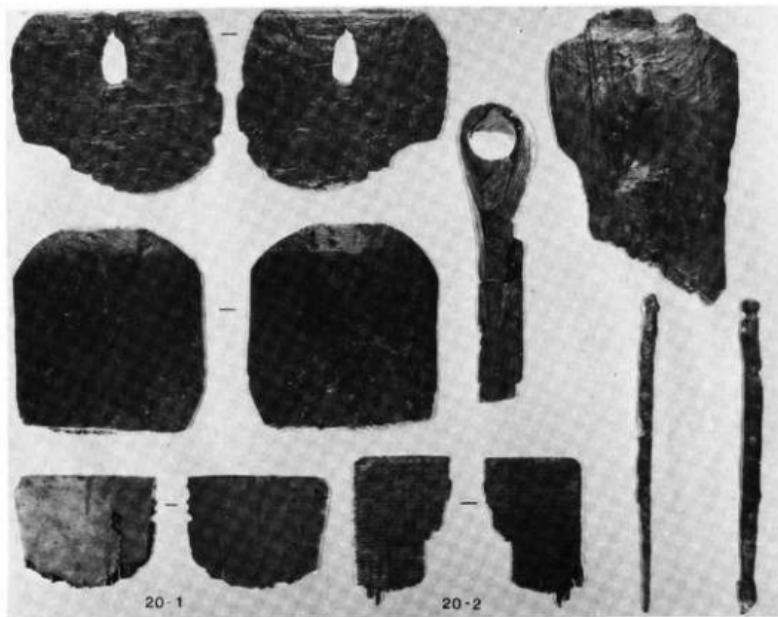


2. 木製品

図版16



1. 高坏、鳥形状木製品



2. 木製品、漆器

昭和55年12月15日 印刷
昭和55年12月25日 発行

利府川河川改修工事に伴う

西川津遺跡発掘調査報告書Ⅰ

編集・発行 島根県教育委員会
松江市駿町1番地
印刷・製本 株式会社報光社
平田市平田町993

これは、発行者の了解を得て当協会が増刷・頒布するものである。

島根県文化財愛護協会